

長野原町やんば天明泥流ミュージアム 年報

第2号

令和4年度事業報告

2023



やんば天明泥流ミュージアム
Yamba Tenmei Mudflow Museum

序

令和4年やんば天明泥流ミュージアムは開館から2年目を迎えた。本年は浅間山天明噴火240回忌にあたり、浅間山天明噴火の展示や調査研究にかかる県内外の博物館施設等が連携して記念事業が開催された。

当館は、令和3年4月にオープンし、開館初年度は博物館として整えていくべき活動について検討や準備を行い、令和4年度にはその中で開館1周年記念事業を実施したほか、学芸員講座を240回忌記念事業として位置付け4回の講座を実施した。サポーターの活動の開始、体験学習の試行などにも取り組んできた。まだまだ、博物館として取り組むべき活動は数多くあるが、今後も職員、地域の皆さん、博物館を支えてくださるサポーターの皆さんと一丸となって一歩ずつ活動を拡充させていきたいと考えている。

令和5年3月

館長 古澤 勝幸

目 次

I 事業

1. 展示	1
2. 調査研究	3
3. 普及事業	5
4. 資料の収集・保存・活用	8
5. 広報活動	12
6. サポーターの活動	13

II 管理・運営

1. 組織	14
2. 入館状況	14
3. 収入状況	17
4. ミュージアムショップの運営	17
5. 寄付・寄贈	17
6. 施設管理	18

III 研究ノート

・群馬県吾妻郡長野原町林地区出土「三家」墨書土器をめぐって —6世紀から7世紀の吾妻地域の動向に着目して—	高橋 人夢・・・20
・麻づくりの生活史 一元「岩島麻」農家の古老の聞き取りから—	藤野 麻子・・・30
・天明泥流から救出された人々（一）—上野国群馬郡川島村を例に—	古澤 勝幸・・・43

1. 事業

1. 展示

(1) 常設展示

当館の常設展示は、ア.天明泥流体感シアター、イ.天明泥流展示室、ウ.テーマ展示室、エ.長野原町立第一小学校旧校舎で構成されている。この内、エは水没地区から一部が移築された長野原町立第一小学校旧校舎を利用している。各室の概要・構成、令和4年度の取り組みは以下のとおりである。

ア.天明泥流体感シアター—封印されたハッ場のくらし—

天明泥流に襲われる前の農民の暮らし、浅間山噴火の状況、天明泥流の発生と泥流が村を襲う様子、発掘調査の状況を幅7m、高さ4mの大スクリーンで、映像と音響を駆使して体感する。

イ.天明泥流展示室—1783年8月5日のモノ語り—

[ガイドンス]

天明3年と現代のハッ場の地理と歴史。発掘調査の概要を紹介。

[よみがえる人々のくらし]

たべる、つくる、ともし、なおす、いろどる・いのる、のコーナーを設定し、実物の出土資料を展示し、泥流被災前のハッ場の人々の暮らしを紹介、幕府や藩からの厳しい制約や重い年貢に苦しめられた暗い江戸時代の農山村のイメージをくつがえす。

令和4年度はこのうち、「つくる」の展示コーナーに、久々戸遺跡、東宮遺跡、横壁中村遺跡から出土した江戸時代の通貨を追加展示した。

[うばわれた日常]

天明泥流堆積地層のハギトリ、天明浅間噴火経過、迫りくる泥流、逃げ惑う人々、一命をとりとめる、泥流の威力のコーナーを設定し、噴火の経過、天明泥流のすさまじさ、スピード感、破壊力の理解を促す。

[災害の記憶]

先人たちが残した災害の記憶、記録が伝える被害と復興、被害の全貌、今も語り継がれる災害の記憶、自然とともに生きるのコーナーを設け、天明浅間山噴火がどのように伝えられ、それによって何がわかり、私たちは今後自然とどう向き合うべきかを問いかける。

ウ.テーマ展示

発掘調査で発見された数多くの縄文遺跡から出土した、縄文時代草創期・早期・中期・後期・晩期の各時期、弥生・古墳・平安の各時代の豊富な出土遺物を、壁面・ステージ・ケース・抽出ケースを用いて、ハッ場の歴史を時間軸、他地域との交流を中心に構成した。令和4年度は、縄文時代中期後半の大型浅鉢土器に替えて、大木系土器（南東北系）を展示した。

エ.長野原町立第一小学校旧校舎

長野原町の1/10,000 全城航空写真を張り込んだテーブルや、上毛かるたを作った浦野匡彦、長野原町の生業、小学校の教材教具を展示。教材教具に触れたり、かるたで遊ぶコーナーなども設けている。



天明泥流展示室



テーマ展示室

(2) 企画展示

併設の「長野原町立第一小学校旧校舎」に新たにガラスケース1台を設置し、2回の季節展示を行った。

ア.「むかしの教科書～国語編～」

学校教科書、とりわけ国語の教科書には、その時代の社会状況や世相が反映される。当館に所蔵されている旧第一小学校関連資料のうち、明治から昭和30年代にかけての国語の教科書20点余りを展示し、学校制度と教科書の変遷を通じた第一小学校の歴史を紹介した。

展示期間：5月28日～11月28日

展示資料点数：22点

イ.「長野原に伝わる小正月のツクリモノ」

かつて小正月には各家庭において家内安全や豊産祈願を祈って製作されていたツクリモノ。特に「キジグルマ」は全国でも長野原町を含む群馬県西部と福岡・熊本・大分各県でしか作られないものである。町で所蔵するツクリモノの中から30点余りを紹介した。

展示期間：11月29日～令和5年5月27日

展示資料点数：36点



「むかしの教科書 ～国語編～」



「長野原に伝わる小正月のツクリモノ」

2. 調査研究

令和4年度における当館が実施したり、研究機関・大学の調査研究に支援・協力した調査研究は下記のとおりである。

(1) 調査研究

天明浅間山噴火、天明泥流、ハッ場地区をはじめとする本町の歴史・文化・生業、ハッ場ダム建設にかかる調査の歴史に関することについて幅広い視点で捉え、各学芸員が調査研究を実施した。成果は、当館での展示に反映させるとともに学芸員講座において報告した。各学芸員の調査研究は下記のとおりである。

ア. 古澤勝幸（館長：学芸員）

浅間山天明噴火や泥流を描いた絵図の内容を詳細に検討した。絵図を作成場所と内容からふたつに分け、ひとつは長野県側で描かれた天明3年旧暦4月～7月の噴火の経過を記録した絵図。もうひとつは主に群馬県側で描かれた、泥流発生地点や、溶岩とともに流れる泥流状況、被災範囲が書かれた絵図である。これらを、絵図の構図、内容の構成要素、詞書などから詳細に検討した。調査内容の成果は令和4年6月25日の学芸員講座「天明浅間山噴火の経過と泥流の発生―描かれた天明泥流②―」で解説した。

イ. 富田孝彦（学芸員）

昨年度、調査・研究の成果として1月29日の学芸員講座で発表する予定であったが、新型コロナ感染拡大による休館で中止となった。そのため、今年度にスライドし、7月9日の学芸員講座で「ハッ場ダム建設に伴う発掘調査―28年間を振り返る―」として発表した。その他、調査報告書を編集するにあたって、縄文時代後期前葉（堀之内2式期）のいわゆる「福田類型」注口土器の集成を継続的に実施している。本町の当該期住居跡や土坑から出土する注口土器のほとんどが本類型を主体としていることから、本類型注口土器の供給地のひとつと考えられ、交易的性格が想起されることを指摘したことがある。今回は時間や紙幅の制約があり、住居一括土器の特徴を抽出するに留まったが、本町出土の本類型注口土器を集成し、その傾向を『林中原1遺跡XII』（長野原町埋蔵文化財調査報告第50集）に収録した。

ウ. 高橋人夢（学芸員）

天明3年浅間山大噴火に関する膨大な史料は記録・文書の類が多くを占めているが、この他に随筆も多数残されている。これらを含む文学作品は個人の感情を多分に含むため、これまでの歴史研究の素材としては避けられてきたきらいがあるように見受けられる。本年はこれらの史料を手がかりに当時の人々の心情からこの噴火に対する認識を探ることを試みた。

具体的には、菅真澄（1754～1829）『伊那の中路』・『くめじの橋』、羽鳥一紅（1724～1795）『文月浅間記』、小林のせ（？～1790）『浅間記』、大田南畝（1749～1823）『半日閑話』『信州浅間嶽下奇談』に焦点を当て、それぞれの随筆から読み取れる災害認識を探り、文学作品は仮にフィクションを含んでいたとしても、当時の人々の心情をうかがい知ることのできる重要な歴史史料になりうるものであると結論づけた。

本年の研究は、9月10日（土）に開催された学芸員講座「浅間山噴火と文学」にて参加者に発表するなどして公表した。また、令和6年度に刊行される書籍にて概要を公表する予定である。

エ. 藤野麻子（学芸員）

吾妻川に沿って走る国道145号線沿いに形成された現在の長野原市街地周辺も、天明泥流により大きな被害を受けた地域のひとつである。死者200名という数は、土石なだれの直撃を受けた鎌原村に次ぐ多さであるが、その史実はあまり広くは知られていないように思われる。天明の浅間山噴火から240年という節目の年にあわせ、学芸員講座という機会を利用して、天明泥流の痕跡をたどる当地区の町歩きを企画・調査し、町民ら20名とともに往復4キ

口ほどの行程を歩いた（令和4年10月15日実施）。今に残る社寺や堂宇、橋梁などを巡り、各地に伝承として残る被災地点や範囲と、発掘調査で証明されたそれらとが重なる部分が多いこと、ゆえに地域災害における民間伝承の研究が大切であることについて解説し、参加者とともに確認した。

また、前年度に引き続き、吾妻地域に伝わる麻づくりの生業について聞き取り調査をおこなうため、「岩島麻保存会」による通年の活動に参加した。その成果を巻末の研究ノートにまとめる。

（2）大学・調査研究機関への協力・支援

ア. 科研費「災害で埋没した建物による民家建築史の研究」

奈良文化財研究所の研究者が、文部科学省科学研究費基盤研究（A）（研究代表：奈良文化財研究所 箱崎和久）の助成を受けて令和2年度～6年度に計画している「災害で埋没した建物による民家建築史の研究」において、当館が所蔵、管理する資料の実地調査、及び長野原町内に現存する民家調査の実施に協力した。

イ. 國學院大學文学部考古学実習、科研費「半定住狩猟採集民の社会組織と葬制：骨考古学先端技術との連携による先史社会の復元」

國學院大學文学部考古学研究室が行っている考古学実習及び大学研究者らが文部科学省科学研究費（S）（研究代表：國學院大學 谷口康浩）「半定住狩猟採集民の社会組織と葬制」の助成を受けて実施している「居家以岩陰遺跡」発掘調査において地元対策や庁内調整などの協力を行った。調査に区切りがついた段階で、当館としては当館が管理する縄文時代の出土遺物や人骨との比較研究・展示に繋げていきたいと考えている。

3. 普及事業

(1) 展示解説

土日祝日を中心に10:30と13:30から学芸員またはミュージアムサポーターによる展示解説を行っている。常設展示室・テーマ展示室を45～60分程度で解説している。

令和4年度は計62日実施し、延べ324人が参加した。



展示解説

(2) 行事

ア. 開館1周年記念講演会

開館から1年を迎えるにあたり、浅間山研究の第一人者であり、展示やシアター映像の監修者でもある日本大学文理学部教授 安井真也氏を講師に招き、記念講演会を開催した。

日程：5月15日（日）

会場：長野原町住民総合センター大ホール

時間：13:30～15:30（受付開始13:00）

題目：「活火山・浅間山の噴火史と謎だらけの天明噴火」

講師：日本大学文理学部教授 安井真也氏

参加者：計119名

イ. 開館1周年記念写真展「ハッ場ダム発掘調査26年のあゆみ」

開館1周年の節目に、26年間にわたるハッ場ダム建設にともなう発掘調査についてあらためて広報・普及を行うため、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団所蔵の写真パネルを借用し、展示を行った。

会期・会場：5月15日 長野原町住民総合センター エントランスホール（講演会会場）

5月16日～31日 やんば天明泥流ミュージアム、体験学習室



記念講演



記念写真展

ウ.学芸員講座

令和4年度の学芸員講座は、天明3年浅間山噴火から240回忌にあたることに因み企画された「浅間山大噴火から240年・『天明三年』を語り継ぐ」の連携事業として実施された。講義は下記の3講+関連企画で開催し、講座は各回13.30から質疑応答を含めて1時間30分程度の講義を、まち歩き企画は9～11時の2時間で往復4キロの行程によるツアーを行った。各回の概要は以下のとおり。

回	日程	内容	講師	受講者
1	6月25日(土)	「天明浅間山噴火の経過と泥流の発生(描かれた天明泥流②)」	古澤 勝幸 (当館館長)	35名
2	7月9日(土)	「ハツ場ダム建設に伴う発掘調査 - 26年間を振り返る -」	富田 孝彦 (当館学芸員)	34名
3	9月10日(土)	「浅間山噴火と文学 - 文学でたどる天明3年浅間山噴火の経過 -」	高橋 人夢 (当館学芸員)	31名
4	10月15日(土)	<関連企画>学芸員と巡る歴史まち歩き 「天明泥流痕跡ツアー ～長野原市街地編～」	藤野 麻子 (当館学芸員)	20名



学芸員講座第1回



学芸員講座第2回



学芸員講座第3回



学芸員と歩く歴史まち歩き企画

(3) 体験学習

本年度より、夏休み期間の一般来館者を対象とした体験学習プログラムを本格的にスタートさせた。また、学校団体向けには、今後の開催に向け管内小学校児童を対象に試験的な開催を行った。

ア、「夏休み親子体験学習プログラム」

展示品の複製品を用いるなどして、館内の展示品や所蔵品に関連した3つのオリジナルプログラムを考案し、開催した。このうち、「十分盃」の模型をつくろうは、ミュージアムサポーターの発案によるものである。各回の概要は以下のとおり。

回	内容	開催日	参加者
1	江戸時代の道具でエゴマ油をしぼってみよう	8月7日	2組4名
		8月16日	3組7名
2	フシギな器「十分盃」の模型をつくろう	7月31日	1組3名
		8月19日	4組8名
3	ホンモノの縄文土器で拓本をとろう	8月12日	1組4名
		8月21日	2組4名



体験学習（エゴマ油をしぼってみよう）



体験学習（十分盃の模型をつくろう）

(4) 学習支援事業

クイズ形式の見学シートとして前年より行っている「ミュージアムクイズ」では、小学校低学年向けの〈初級編〉、小学校高学年向けの〈中級編〉に加えて、中学生～大人向けの〈上級編〉を作成し、3種類から選択できるようにした。参加者には引き続き東宮遺跡で採取した軽石に解説をつけた「天明3年の軽石」を記念品として配布している。

(5) 印刷物の刊行

『長野原町やんば天明泥流ミュージアム年報 第1号 令和3年度事業報告』令和4年10月14日発行

(6) 無料開放

令和4年10月28日(金)の群馬県民の日に合わせてミュージアムを無料開放した。当日の来館者は計113名であった。

4. 資料の収集・保存・活用

(1) 資料の特別閲覧

研究者等が申請により資料の閲覧や写真撮影等を行った。令和4年度は計6件であった。

No.	資料名称	点数	月日	申請者	目的
1	横壁中村遺跡出土 縄文土器	96	9月5日～9月6日	個人	調査研究
2	石川原遺跡出土 縄文時代勾玉	1	9月21日	國學院大學文学部 谷口 康浩	調査研究
3	石川原遺跡出土 縄文時代耳飾り	14	10月4日	個人	調査研究
4	大津区有文書ほか	37	11月11日～11月12日	嬉志村教育委員会 (鎌原地区発掘調査検討 委員会 専門部会 渡辺 尚志)	調査研究
5	石川原遺跡出土建築部材	一式	11月21日～11月22日	独立行政法人国立文化財 機構奈良文化財研究所 箱崎 和久	調査研究
6	東宮・西宮遺跡ほか出土建築部材	一式	2月9日～3月22日	独立行政法人国立文化財 機構奈良文化財研究所 箱崎 和久	調査研究

(2) 資料の貸出・借出

ア. 資料貸出

令和4年度の資料貸出については、計2件であった。なお、No.2の貸出資料の所蔵者は群馬県で、当館は取蔵場所の責任者として資料貸出立会の代行業務を行った。

No.	資料名称	点数	借用期間	申請者	目的
1	浅間焼け苔妻川・利根川筋被害絵図	1	6月23日～9月27日	埼玉県上川博物館	令和4年度企画展「海なし雪なし火山なし—ないけどある！埼玉との深い関係—」(会期:7月9日～8月31日)において展示するため
2	中瀬Ⅱ遺跡出土 サトイモ石膏型・対比資料	31	3月13日～R6年1月12日(予定)	嬉志郷土資料館	令和5年度企画展「村の小さな博物館のボンベイ展」(会期:R5年4月28日～12月26日)において展示するため

イ. 写真貸出

令和4年度の写真貸出については、計10件であった。

No.	資料名	点数	申請月日	申請者	目的
1	「浅間焼け吾妻川・利根川筋被害絵図」、「浅間山焼昇之記」「武蔵国幸手辺利根川の泥流下描写図」、常林寺の梵鐘	3	5月11日	埼玉県立川の博物館	令和4年度企画展「海なし雪なし火山なしーないけどある！埼玉との深い関係」(会期:7月9日～8月31日) 展示及び図録掲載のため 令和4年度企画展「天明浅間噴火240年」(会期:7月7日～10月2日)の展示及び図録掲載のため
2	「浅間焼け吾妻川・利根川筋被害絵図」	1	5月30日	玉村町歴史資料館	浅間押し240周年追悼記念誌「天明3年浅間山噴火災害復興における熊本藩の貢献」(8月5日刊行)に掲載するため
3	「浅間記」、「浅間山焼昇之記」「武蔵国幸手辺利根川の泥流下描写図」	2	6月10日	郷恋村未来創造課	6月30日「三原地域めぐり」での説明資料作成のため
4	「天明泥流体感シアター」の一部	1	6月14日	個人	浅間縄文ミュージアム令和4年度秋季企画展「平安時代は平安でなかったー仁和の千曲川大洪水と天仁の浅間山噴火ー」(会期:10月1日～11月27日)の展示に使用するため
5	「長野原町やんば天明泥流ミュージアム常設展示図録」掲載図版	1	7月8日	御代田町教育委員会	「学習まんが日本の歴史 第10巻 天下泰平の時代(江戸時代Ⅱ)」(12月6日刊行)に掲載のため
6	「浅間山焼昇之記」「軽井沢被災状況の図」・「空閑所被災状況の図」・「武蔵国幸手辺利根川の泥流下描写図」	3	7月20日	日本大学文学部	令和4年度日本大学文学部資料館企画展「活火山・浅間山展」(会期:11月21日～12月20日)の展示や図録掲載のため
7	「天明泥流体感シアター」の一部	1	8月3日	(株)小学館	校外学習のしおり作成のため
8	縄文土器、弥生土器、須恵器	3	8月23日	伊勢崎市立あずま小学校	令和4年度渋川市北橋歴史資料館企画展「天明泥流と渋川」(会期:3月15日～6月18日)で解説パネル及び解説図録で使用するため
9	「浅間山焼昇之記」「空閑所被災状況の図」・「武蔵国幸手辺利根川の泥流下描写図」	2	11月29日	渋川市教育委員会	企画展「天明三年、浅間山噴火その時安中藩領は」(会期:4月1日～6月26日)の展示のため
10	「浅間山焼昇之記」「横川開所の被災状況の図」、「長野原町やんば天明泥流ミュージアム常設展示図録」掲載図版	2	1月13日	安中市教育委員会	

ウ. 借用

ハツ場ダム建設に伴う発掘調査資料一式は、令和2年度より所蔵者の群馬県から借用しており、令和5年度以降に、長野原町に無償譲渡される予定である。

(3) 資料の寄贈・寄託

ア.資料

令和4年度の新規の寄贈・寄託については、寄贈が1件、寄託が0件であった。当館で寄託を受けている資料は令和3年度未現在で計14点である。

令和4年度寄贈資料一覧

計1件

(敬称略)

No.	区分	資料名	月 日	寄贈者
1	寄贈	古銭計 75 枚及び旧通貨計 27 枚	9月8日	西吾妻環境衛生施設組合所長

令和4年度寄託資料一覧

計14件

(敬称略)

No.	寄託者	資料名	備考
1	関 運蔵	浅間大変記	更新
2	富澤 久幸	浅間山津波吾妻郡押出図	更新
3	富澤 久幸	浅間山津波実記 上	更新
4	市村 雄平	浅間大変記	更新
5	市村 雄平	浅間山噴火の災害	更新
6	市村 雄平	浅間山展覧会出品資料の目録	更新
7	美斉津 洋夫	天明三年大噴火を伝えた瓦版	更新
8	美斉津 洋夫	浅間山焼算記 1847年小山氏写本	更新
9	美斉津 洋夫	上州吾妻郡岩下村浅間山焼灰砕砕郷方不作御届帳	更新
10	美斉津 洋夫	天明三年浅間山大変図	更新
11	美斉津 洋夫	天明三年七月六日、七日当日震動浅間山焼出し上州吾妻郡に噴出し人馬押流す所の図	更新
12	高橋 邦光	常林寺の梵鐘	更新
13	川原湖区長	川原湖区有文書	更新
14	与喜屋区長	与喜屋区有文書 No.1～254 計 257 点	更新

イ.図書 (敬称略 順不同)

文化庁

国土地理院 応用地理部 地理情報処理課 火山地理情報係

(公財)日本武道館

(公財)日本博物館協会

群馬県地域創生部文化財保護課

群馬県立歴史博物館

群馬県浅間家畜育成牧場

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(公財)群馬県教育文化事業団

(一財)群馬地域文化振興会

埼玉県立自然の博物館

埼玉県立川の博物館

新潟県立歴史博物館

(公財)福島県文化振興財団

(公財)いわき市教文化事業団

(公財)茨城県教育財団

(公財)千葉県教育振興財団

(公財)印旛都市文化財センター

(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

(公財)富山県文化振興財団

安中市教育委員会

安中市学習の森ふるさと学習館

伊勢崎市教育委員会

太田市教育委員会

渋川市赤城歴史資料館

渋川市教育委員会

渋川市北極歴史資料館

下仁田自然史館

下仁田町教育委員会

高崎市教育委員会

高崎市観音塚考古資料館

かみつけの里博物館

多胡碑記念館

館林市教育委員会

玉村町教育委員会

玉村町歴史資料館

嬭恋村未来創造課

嬭恋村教育委員会

嬭恋郷土資料館

富岡市教育委員会	諏訪市教育委員会
中之条町教育委員会	茅野市ハケ岳総合博物館
東吾妻町教育委員会	東御市教育委員会
藤岡市教育委員会	長野市立博物館
前橋市教育委員会	南相木村教育委員会
前橋文学館	南アルプス市教育委員会
みどり市教育委員会	小千谷市教育委員会
岩宿博物館	柏崎市教育委員会
吉岡町教育委員会	佐渡市世界遺産推進課
八戸市教育委員会	佐渡市教育委員会
いわき市教育委員会	津南町教育委員会
北塩原村教育委員会	富山市教育委員会
本宮市教育委員会	沼津市教育委員会
小美玉市生涯学習課	刈谷市歴史博物館
小美玉市史料館	(公財) 明治安田クオリティオブライフ文化財団
上高津貝塚ふるさと歴史の広場	(一財) 地域創造
柏市教育委員会	玉川大学教育博物館
船橋市教育委員会	日本大学文理学部資料館
四街道市教育委員会	立正大学博物館
北本市教育委員会	重監房資料館
熊谷市教育委員会	浅間山ジオパーク推進協議会
幸手市郷土資料館	NHK「明日をまもるナビ」制作班
深谷市教育委員会	(株) 飯塚組
富士見市教育委員会	国際文化財(株)
寄居町教育委員会	(株) 小学館
江戸川区郷土資料室	(株) 地域文化財研究所
葛飾区教育委員会	(株) バスコ
相模原市教育委員会	(有) 毛野考古学研究所
浅間縄文ミュージアム	木簡学会
飯田市教育委員会	佐久考古学会
上田市教育委員会	縄文Z I N E 編集部
岡谷市教育委員会	田村正勝
小諸市教育委員会	堤隆
佐久市教育委員会	

5. 広報活動

開館2年目となり、前述の教育普及事業（開館1周年記念講演会、学芸員講座、夏休み体験学習等）を中心に、チラシ・ポスターの配布、インターネット・SNSでの告知、町内回覧など、町民や近隣教育施設への周知を行った。

教育・展示関連の連携事業としては、令和4年が天明3年浅間山噴火から240回忌にあたることに因み企画された「浅間山大噴火から240年・『天明三年』を語り継ぐ」に参画し、関連する16機関とともに、学芸員講座との連携やスタンプラリーの実施を開催した。

また長野原町が力を入れるハッ場地区の地域振興にともなう「ハッ場ナイトフェスタ」「長野原町アプリ」「ウォークラリー」等の事業に、関連施設として協力した。

メディア関連では、エフエム群馬の番組で生中継で紹介されたほか、新聞等では後述するサポーターの会の発足や、各普及事業の開催について取り上げられた。

(1) 町広報

『広報ながのほら』

No.	内容
6月号	「学芸員講座」案内
7月号	「夏休み親子体験学習プログラム」案内
9月号	「学芸員講座関連企画まち歩き」案内
3月号	(株)歴史の杜より企業版ふるさと納税寄付



(2) 放映・放送

No.	放映・放送日	メディア名	番組名
1	9月6日	エフエム群馬	「WAI WAI Groovin」生中継

(3) インターネットを利用した情報の提供

インターネットを利用した情報公開については、公式ホームページと公式フェイスブックページを利用して、常に情報更新を行っている。

施設紹介・利用案内のほか、トピックスとして定期的に講座等のイベント告知や開催報告を公開し、また団体見学の申込書等もダウンロード可能となっている。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
閲覧数	1,573	1,683	1,479	1,521	2,018	1,665	1,498	1,333	652	645	644	1,005

(4) 連携企画・キャンペーン等協力

No.	名称	主催団体	期間
1	ハンドブック 群馬の博物館・美術館	群馬県博物館連絡協議会	通年
2	ぐんま県民カレッジ	群馬県生涯学習センター	通年
3	「浅間山大噴火から240年・『天明三年』を語り継ぐ」	関連16機関	6月～令和5年8月
4	「ハッ場ナイトフェスタ」(入館者に記念品配布)	長野原町	9月17日
5	「長野原町アプリ」リリース(入館料割引クーポン発行)	長野原町	11月15日～通年
6	「歩いて・見て・味わう 長野原草津口駅・川原湯温泉駅ウォークラリー」(入館者に記念品配布)	東日本旅客鉄道(株)高崎支社	10月29日～12月25日

6. サポーターの活動

やんば天明泥流ミュージアム・ミュージアムサポーターとは、館内外の案内や解説、体験学習や各種事業のサポートを通して、ミュージアムと来館者の橋渡し役となるボランティアのこである。

本年度は、前年度に開催したサポーター養成講座を終了した19名が、ミュージアムサポーター第1期として活動を始めた。

サポーターのおもな活動は、ア.館内展示解説、イ.美化・清掃活動、ウ.体験学習・イベント等の運営補助、エ.その他（ミュージアムの展示・企画・運営にまつわる補助等）である。

(1) サポーターの活動

ア. 館内展示解説

土日を中心とした一般来館者向けと、団体見学者向けに、館内の展示解説を行っている。ミュージアム側で用意した「解説ガイドブック」をもとに、展示の基本となるポイントは全員で共有しつつ、個人の経験・得意分野や独自に学んだことを加えながら解説スキルを高めようという姿勢も見られ、来館者からも好評である。

イ. 美化・清掃活動

5月～10月まで月に2回のペースで、職員とともに館内外の清掃、駐車場を含めた外構の除草等を行っている。植物に詳しいサポーターみずからが花壇用にと花苗を提供してくれるなど、積極的に活動している。

ウ. 体験学習・イベント等の運営補助

講演会や体験学習等のイベントでは職員とともに運営にあたっている。子ども向け体験学習のプログラム考案にも関わった。

エ. その他（ミュージアムの展示・企画・運営にまつわる補助等）

展示室内の体験コーナーに設置する「竿ばかり」のための補助具や、体験学習で使用する「搾油器」のレプリカの製作を担当した。

本年度の活動実績は下記のとおり。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
延べ人数	27	44	36	40	33	29	28	24	29	11	18	16	335

(2) 総会・研修会

サポーターの会に関する総会・研修会は下記のとおり開催された。

名称	開催日	内容
サポーターの会発足式・第1回総会	4月9日	規約について、会長・副会長の選出（※）、活動計画等
サポーターの会ミーティング&研修会	12月13日	前期の活動報告、展示解説の再研修、意見交換等

（※）令和4年度の会長は奈良誠一氏、副会長は石渡江里子氏で承認された。



サポーター研修

(3) サポーター研修

解説活動の改善と充実、サポーター同士の交流を深めるため、サポーター研修を実施した。

日時： 3月8日（水）8：30～16：30

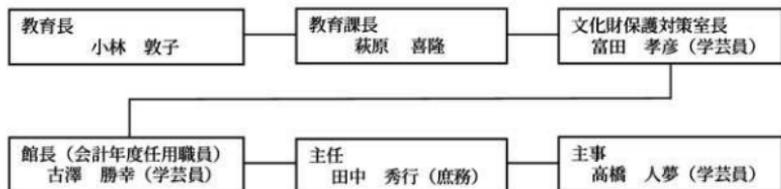
研修先： 富岡製糸場と絹産業遺産群世界遺産センター、富岡製糸場

参加者： サポーター12名・職員6名 計18名

II. 管理・運営

1. 組織

当館は長野原町直営のミュージアムである。教育委員会教育課文化財保護対策室内に位置付けられている。



会計年度任用職員4名 向出 治恵 (学芸員)・藤野 麻子 (学芸員)・萩原 一美・篠原 芳江

2. 入館状況

(1) 令和4年度入館者数

入館者数 11,025名 開館日数 309日 (うち土日祝 116日)

区 分		令和3年度	令和4年度	前年対比	
有料 観覧者	個人	一 般	8,084人	6,690人	82.80%
		小・中学生	606人	546人	90.10%
	団体	一 般	722人	1,217人	168.60%
		小・中学生	1,146人	858人	74.90%
	割引	一 般	36人	22人	61.10%
		小・中学生	13人	7人	53.80%
		身障者 (付添を含む)	362人	400人	110.50%
小 計		10,969人	9,740人	88.80%	
無料 観覧者	減免申請等		358人	385人	107.50%
	町民		753人	335人	44.50%
	招待券		186人	108人	58.10%
	未就学児		218人	141人	64.70%
	無料開放 (県民の日)		147人	113人	76.90%
	その他 (取材など)		300人	203人	67.70%
	小 計		1,962人	1,285人	65.50%
合 計		12,931人	11,025人	85.30%	

(2) 新型コロナウイルス感染拡大防止対策

- ア.臨時休館（令和4年度はなし）
- イ.入館時の手指消毒、マスク着用、検温、健康状態申告書の記入
- ウ.館内の換気・消毒
- エ.受付にパーテーションを設置
- オ.団体見学のグループ分け

(3) 団体利用状況（学校・施設等）

令和4年度の団体組数は90組であった。そのうち学校関係が31組（大学8・高校6・中学校6・小学校11）を数え、全体の34.4%を占める。昨年と比べると一般団体が増えた。

令和4年度学校団体一覧

学校合計31組（一般360名、小中学生768名）

（敬称略）

№	日付	団体名	一般	
			一般	小中学生
1	5月31日	長野原町立心桑小学校1～5年生	9	22
2	6月2日	前橋市立元総社南小学校	5	22
3	6月23日	高崎市立矢中中学校	9	118
4	6月30日	群馬県立薮学校（小学部）	5	6
5	7月2日	富山大学理学部地球科学科	15	0
6	7月12日	成城学園初等学校4年生	11	101
7	7月14日	東吾妻町立坂上小学校6年生	10	9
8	8月2日	桜蔭中学校1年生	6	46
9	8月2日	常総学院高校1年生	33	0
10	8月2日	駒澤大学（浅間山ジオパーク推進協議会）	15	0
11	8月4日	桜蔭中学校1年生	6	47
12	8月4日	常総学院高校1年生	40	0
13	8月6日	桜蔭中学校1年生	6	46
14	8月8日	桜蔭中学校1年生	6	45
15	8月9日	常総学院高校1年生	15	0
16	8月9日	桜蔭中学校1年生	6	44
17	8月11日	独協埼玉中学高等学校サイエンス部	13	14
18	9月8日	群馬県立長野原高校商業実践校外視察	7	0
19	9月15日	群馬県立長野原高校商業実践校外視察	7	0
20	9月15日	筑波大学山岳フィールド実習	22	0
21	9月15日	新潟大学地質フィールド実習	13	0
22	9月20日	長野原町立中央小学校6年生	3	15
23	9月23日	國學院大学考古学研究室	12	0
24	9月29日	長野原町立西中学校	7	25
25	10月7日	沼田市立薄根小学校5年生	4	51
26	10月14日	長野原町立北軽井沢小学校3年生	4	11
27	10月22日	群馬大学理工学部土木環境プログラム2年生	39	0
28	11月11日	伊勢崎市立あづま小学校5年生	5	94
29	11月25日	榛東村立南小学校5年生	5	52
30	3月23日	早稲田大学考古学研究室	15	0
31	3月24日	群馬大学	7	0

令和4年度一般団体一覧
 一般合計 59 組 (一般 1,293 名、小中学生 83 名)

(敬称略)

No.	日付	団体名	一般	小中学生
32	4月10日	株式会社中沢ヴィレッジ	13	0
33	4月14日	長野原町食生活改善推進協議会	19	0
34	6月2日	金島地区民生児童委員協議会	9	0
35	6月7日	岩野谷地区区長会・民生委員民生児童協議会	15	0
36	6月9日	中之条町文化協会	19	0
37	6月11日	古代に親しむ会	19	0
38	6月16日	長野原町高齢者教室	25	0
39	6月17日	太田市ファミリー・サポートセンター	42	0
40	6月27日	上田市上田地域消費者の会	9	0
41	7月7日	高崎市女性防火クラブ	30	0
42	7月10日	駒寄老人クラブ	22	0
43	7月14日	オリジンの村大郎荘	25	0
44	7月19日	渋川市豊秋公民館	15	0
45	7月21日	広瀬川河畔緑の少年団	11	8
46	8月21日	(一社) ガールズスカウト群馬県連盟	53	75
47	8月30日	KTT・H29 同期会 (関地区中平成 29 年度事務)	10	0
48	9月24日	日本ジオパークネットワーク関東ブロック大会	19	0
49	9月24日	渋川公民館成人学級	15	0
50	9月27日	中之条町婦人会	25	0
51	9月29日	玉村町公民館さわやか教室	20	0
52	9月29日	中之条町老人大学	35	0
53	9月30日	玉村町公民館さわやか教室	17	0
54	10月2日	NPO 法人有珠山周辺ジオパーク友の会	22	0
55	10月2日	(一社) 日本旅行作家協会	21	0
56	10月3日	高山村食生活改善推進協議会	17	0
57	10月4日	安中文化会	22	0
58	10月6日	羽根尾老人会	19	0
59	10月6日	NPO 法人梓川流域を守る会	18	0
60	10月7日	安中市民児協・磯部地区民児協	15	0
61	10月7日	多々良公民館松風セミナー	19	0
62	10月11日	太田地区防火安全協会	11	0
63	10月13日	みなかみ町歴史ガイドの会	17	0
64	10月17日	吾妻郡文化財調査委員等研修会	35	0
65	10月18日	JA 多野藤岡みのりの会	12	0
66	10月23日	心楽希望旅行会	22	0
67	10月23日	長野市虫倉れんげの会	11	0
68	10月25日	ジオカフェ	20	0
69	10月25日	群馬県地域婦人団体連合会	12	0
70	10月27日	かわさき市民アカデミー「環境とみどり」	35	0
71	11月1日	山梅会	72	0
72	11月7日	休暇村嬭恋産沢	18	0
73	11月10日	東三河広域連合みらい広域委員会	15	0
74	11月10日	館林市分福公民館シニア学習室	29	0
75	11月11日	長野県神川沿岸土地改良区	16	0
76	11月11日	ハツ場ダム対策事務所	7	0
77	11月14日	渋川市赤城公民館高齢者学級つくし大学	22	0
78	11月14日	北関東3県ダム管理担当者会議	11	0
79	11月15日	館林市分福公民館女性セミナー	31	0

80	11月15日	新河岸川を守る会	25	0
81	11月15日	利根川治水同盟現場見学会	42	0
82	11月17日	日本造園建設業協会	33	0
83	11月18日	沼田ユネスコ協会	17	0
84	11月20日	嵐自治会	14	0
85	11月20日	社会教育事業「染め物教室」	14	0
86	11月20日	城南地区区長会	10	0
87	11月22日	公営電気事業経営者会議	51	0
88	11月28日	岩神町一丁目長寿会	10	0
89	3月17日	厚友親睦会	37	0
90	3月25日	障害福祉サービス事業所やまどり	24	0

3. 収入状況

当館における諸収入は、観覧料のほかミュージアムショップにおける図録などの書籍等販売収入、自動販売機の敷地貸付料がある。

種 別	令和3年度	令和4年度	前年対比
観 覧 料	5,941,100 円	5,229,500 円	88.0%
書籍等販売収入	160,550 円	358,950 円	223.6%
敷地貸付料	13,436 円	16,364 円	121.8%
総 計	6,115,086 円	5,604,814 円	91.7%

4. ミュージアムショップの運営

令和3年11月6日（土）からミュージアムショップの運営を開始した。令和4年度は通年で営業した。運営体制は直営で実施している。

5. 寄付・寄贈

（1）寄付

令和4年度は株式会社歴史の杜（代表取締役 唐沢健二）様より、長野原町で募集している「企業版ふるさと納税」を活用したご寄付をいただいた。



寄付（贈呈式）

6. 施設管理

(1) 建築物・設備・環境衛生・外構等保守管理

- ア 天明泥流体感シアター点検：5月
- イ 展示ケースメンテナンス：7月
- ウ 屋外・館内全体清掃：4月・10月
- エ 館内清掃業務（長野原町シルバー人材センター）：年間
- オ 空調設備保守点検：6月
- カ 空調機フィルター清掃・交換：6月
- キ 空調機Vベルト交換：9月
- ク 自家用電気工作物保安管理月次点検：4月、6月、8月、10月、12月、2月
- ケ 自家用電気工作物保安管理年次点検：6月
- コ エレベーター・小荷物専用昇降機保守点検：7月
- サ 自動扉開閉装置保守点検：5月・11月
- シ トラックヤード開閉装置保守点検：11月

(2) 施設・設備等の工事修繕状況

- ア 電極式蒸気加湿器交換修繕作業：12月
- イ 第一小学校旧校舎 雨樋取り付け修繕作業：4月
- ウ 屋外水道給水設備修繕作業：6月

(3) 防火対策

- ア 消防用設備等（特殊消防用設備等）点検：6月・12月
- イ 自衛消防訓練：12月

(4) 防犯対策

- ア 警備業務外部委託

基本情報

開館時間	9時～16時30分（最終入館16時）
休館日	水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日休館）、年末年始
入館料	一般600円（500円）小学生・中学生400円（300円） （ ）内は15名以上の団体割引料金 長野原町民および未就学児は無料 障害者手帳などをお持ちの方とその介護者（1名）は半額
交通のご案内	道の駅ハッふるさと館から徒歩10分 JR長野原草津口駅から車で10分 関越自動車道渋川伊香保ICから車で約60分 上信越自動車道碓氷軽井沢ICから車で約75分

III. 研究ノート

群馬県吾妻郡長野原町林地区出土「三家」墨書土器をめぐる

—6世紀から7世紀の吾妻地域の動向に着目して—

高橋 人夢

はじめに

群馬県北西部の吾妻郡に属する長野原町では、1994年から2019年にかけてハツ場ダム建設に伴い、調査面積約100万㎡に及ぶ大規模な発掘調査が実施された。その結果、縄文時代から古代・中近世にわたる山間部集落が数多く発見され、主に平安時代に属する古代集落の発掘調査事例も格段に増加したことにより、これまで不明瞭であった古代上野国吾妻郡の歴史的特質、あるいは山間部の集落遺跡の実態を明らかにする緒に着いたのではないかとと思われる。

古代吾妻郡は長田・伊参・大田の3郷からなる小部である。既知の古代吾妻郡に関わる文献史料は僅少であるものの、上信自動車道やハツ場ダム建設に伴う大規模発掘調査事例が増加したことにより、当地域における近年の墨書・刻書土器の出土事例は目覚ましいものがある。これらの資料を集成し古代吾妻郡の動向を考察した高島英之氏によると、2021年3月現在において吾妻郡内に所在する遺跡から出土した墨書・刻書土器は、18遺跡198点に及ぶという〔高島2021〕。なお高島氏のご教示によると、2023年8月現在、その数は22遺跡306点に及ぶ。未報告などのため収録されていない資料もあるため、実際にはこれ以上の遺跡数・点数があるとみてよからう。

これらの資料はこれまで文献史料が知られていない当地域の信仰形態、在地氏族、在地経営を窺い知るにあたって魅力的なものばかりであるが、そうした資料のなかで一際注目されるものが、長野原町林地区の榎木Ⅱ遺跡出土の「三家」、およびこれに類するものが記入された墨書土器である（以後、これらを「三家」関連墨書土器と呼ぶ）。この墨書土器については既に高島氏が詳細に考察を加えており、大化前代にヤマト王権により設置されたミヤケの遺存地名である可能性も含めていくつかの可能性が示されている〔高島2008・2013・2021〕。さらに、高島氏が検討した榎木Ⅱ遺跡出土の墨書土器の他にも同じく林地区に所在する中棚Ⅰ遺跡からも「三家」

と記入された墨書土器が出土しており、長野原町教育委員会が報告している〔長野原町教育委員会2015〕。このように、近接した遺跡から「三家」と記入された墨書土器が出土したことは単なる偶然とは考えられず、大化前代にミヤケが設置されていたことを示唆するものと考えられる。

仮に、墨書土器に記入された「三家」という文字が大化前代に設置されたミヤケを意味するのであれば、当地域の6世紀以降の動向が当然気になるわけであるが、この時期に吾妻地域は飛躍的な展開を遂げる。また後述のとおり、長野原町内で発見された古墳時代に属する遺構は僅少である一方で、検出された古墳時代、とりわけ5世紀後半から6世紀前半に属する遺構が全て林地区から検出されているという点も見逃せない。こうした状況を踏まえ、小稿では、林地区出土「三家」関連墨書土器をめぐる、出土した遺跡やその周辺地域の考察を行うことで、6世紀から7世紀の吾妻地域の動向を明らかにすることを試みる。

1. 長野原町林地区の遺跡と出土した墨書土器について

遺跡の位置と概要 長野原町は群馬県北西部に位置する。本町は高間・白根の両山系と大淵山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・溪沢に向かう山岳傾斜地帯である。町の北西には草津白根山（標高2,170m）、南西には浅間山（標高2,568m）が位置する。町域も北部は高間山（標高1,341m）や王城山（標高1,123m）、吾妻川より南に丸岩（標高1,124m）や管峰（標高1,473m）など、南部は南東から南にかけて浅間山（標高1,756m）、鷹繁山（標高1,431m）、鼻曲山（標高1,655m）など、周囲を1,000m～1,800m級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の烏居峠付近（標高1,362m）を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川

や熊川・白砂川など主に兩岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。吾妻川兩岸は河岸段丘が発達しており、段丘面は最上位・上位・中位・下位の4段階で形成されている。

「三家」関連墨書土器が出土した遺跡は町域北部の吾妻川流域帯にあり、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地している。遺跡はすべて大字林に所在し、この林地地区は王城山南麓に位置している。榎木Ⅱ遺跡は最上位段丘面よりも上に位置し、南に開く緩やかな扇状地形の先端部にある。標高は630～660mである。調査の結果、平安時代の竪穴建物35棟、竪穴遺構3基などが検出された。中朝Ⅰ遺跡は上位段丘面上の非常に狭い段丘面上に立地し、東側には最上位段丘面との段丘崖があり、西側には王城山から流れてくる榎木沢がある。標高は599～600mである。調査の結果、平安時代の竪穴建物4棟などが検出された。

周辺の古代集落の様相 ここでは、長野原町域における古墳時代から平安時代の遺跡について概要を述べたい。

古墳時代については、ハツ場ダム建設に伴う発掘調査が実施される以前は、遺構外遺物として他時代の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片が数遺跡で確認されていたものの、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。ところが、近年の調査により僅少なながら5世紀後半から6世紀前半の竪穴建物が発見されている。まず最上位段丘面に立地する林宮原遺跡で5世紀末～6世紀初頭の竪穴建物が1棟検出された。これに続いて川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡で同時期の竪穴建物1棟のほか、土器器片がまとまって出土している。また上原Ⅳ遺跡でも5世紀後半～6世紀初頭の竪穴建物が2棟検出されている。これらは吾妻川に直面上の最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺にまとまって分布している。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致している。さらに上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる竪穴建物からS字状口縁台付甕や埴形土器が出土し、中期の高杯を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

『群馬県古墳総覧』では大津地区の綜覧長野原町1号古墳(『鉄塚』)と与喜屋地区の綜覧長野原町2号古墳(『五輪塚』)が報告されている(群馬県教育委員会編2017)。2号墳は現況で畑としてならされているが、1号墳は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、林地地区宮原に「てつか(てづか)」や林

地区中棚にある「砂塚」と呼ばれる塚が存在する。いずれも古墳とするには未だ根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

長野原町域における奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない(長野原町教育委員会編1990)。これに対して、平安時代、なかでも9世紀中葉・後半から10世紀前半にかけての集落の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。代表的な遺跡として、西部地区では赤羽根遺跡・向原遺跡、東部地区では長野原一本松遺跡・尾坂遺跡・横壁中村遺跡・榎木Ⅱ遺跡・中朝Ⅰ遺跡・中朝Ⅱ遺跡・林宮原遺跡・下田遺跡・上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・石川原遺跡・上ノ平Ⅰ遺跡などが挙げられ、これらの遺跡から竪穴建物・掘立柱建物・陥し穴・鍛冶遺構などが検出され、当該期集落として把握されている。このなかで榎木Ⅱ遺跡では竪穴建物35棟、上ノ平Ⅰ遺跡では竪穴建物が32棟検出され、後者からは県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永宝」が出土している。これらの遺跡は吾妻川左岸側における中心的な集落として機能していたと考えられる。一方、右岸側では、石川原遺跡が9世紀以降60棟を超える竪穴建物を擁する、西吾妻地域のなかでも大規模な集落であることが明らかとなった。石川原遺跡では10世紀後半でも5棟程度の竪穴建物検出されており、この遺跡のほかにも長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡では11世紀前半の竪穴建物も発見されているなど、東国平野部の古代集落とは性格を異にしている。このような9世紀後半から10世紀前半における当地域の山間部開発については、『政事要略』貞観4年(862)4月10日太政官符にみえる「上野国吾妻郡榎領外正六位上毛野坂本朝臣直道(上毛野坂本朝臣氏は石上部君氏からの改姓氏族)や当地域出土の墨書土器から確米・甘菜・多胡郡周辺の石上部・石上部氏及びその同族の物部氏の進出を想定する必要があるであろう(関口2013)・[高島2021]。当地域は上野国から鳥居峠を経て信濃河へ至る交通路上に位置しており、全時代を通して交通の盛んな地域である。畿内から東河へ至る最重要ルートである確米峠を要する確米郡の部領氏族の同族を吾妻地域に配置していることから、当地域が王権に重視されていたことが示唆される。

遺物に関しては、町域では小型クワ口甕や黒色土器、埴形金具など長野原域との交流を示唆する遺物が発見されており関心を覚える(富田2011)・[高林2015]。竪穴建物の構造についても東南隅・南壁にカマドを構築する点が興味深い。また長煙道型石組カマドの検出例の多さは特徴的で、これらのカマドが多くみられる東北地域

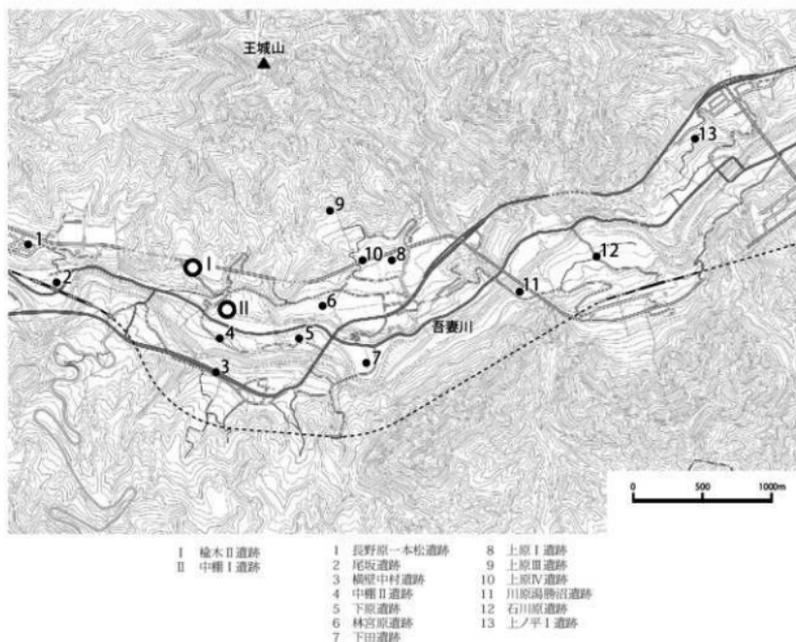


図1 林地地区遺跡群とその周辺遺跡

との交流も視野に入れるべきではないかと現段階では考えているが、石組カマド自体は東吾妻地域で5世紀中頃よりみられるためその系統は判然とし難い。この点については今後の研究の課題としたい。

「三家」の墨書土器について 現在までに「三家」関連墨書土器は7点確認されている（表および図2）。うち、5点が榎木Ⅱ遺跡、2点が中棚Ⅰ遺跡からの出土で、記人数としては計10点である。

このうち、明確に「三家」と記入されたものは、榎木Ⅱ遺跡46号竪穴建物出土の10世紀前半の年代観を有する須恵器椀底部内面に記入された「三家」、中棚Ⅰ遺跡S101出土の9世紀中葉頃の須恵器椀外面体部および内面底部に記入された「三家」、同S102出土の9世紀後半の須恵器椀外面底部に記入された「三家」の計3点・計4ヶ所である。

これ以外に、上記の榎木Ⅱ遺跡46号竪穴建物出土の須恵器椀体部外面に倒位で「三」と記されており、榎木Ⅱ遺跡6号焼土出土の10世紀前半の年代観を有する須恵器椀片の体部外面の文字も「三家」だと思われ

る。これらを踏まえると、30号竪穴建物・遺構外出土の10世紀前半の須恵器環破片に記された「三」も「三家」を意味すると考えられる。46号建物出土の10世紀前半の須恵器環底部内面の「□家」については、「家」の文字の上にある文字を残画から「三」であるとは言えず、「御」という文字の右側の旁付近の残画と考え、「御家」という釈読が提示されており（高島2008・2013・2021）、「三家」に通じると考えられる。

このように、近接する地域から7点の「三家」関連墨書土器が出土している状況を確認した。この「三家」は大化前代に設置された「ミヤケ」を意味している可能性を想定できる。

2. ミヤケについて

ミヤケをめぐる議論 ミヤケは、『日本書紀』には「屯倉」「官家」「弥移居」「弥夜気」、『古事記』には「屯家」「屯宅」「三宅」、『播磨国風土記』には「御宅」「三宅」「三家」とあるように、表記は史料によって様々である。ミヤケは大化前代におけるヤマト王権の直轄地、倉を有す

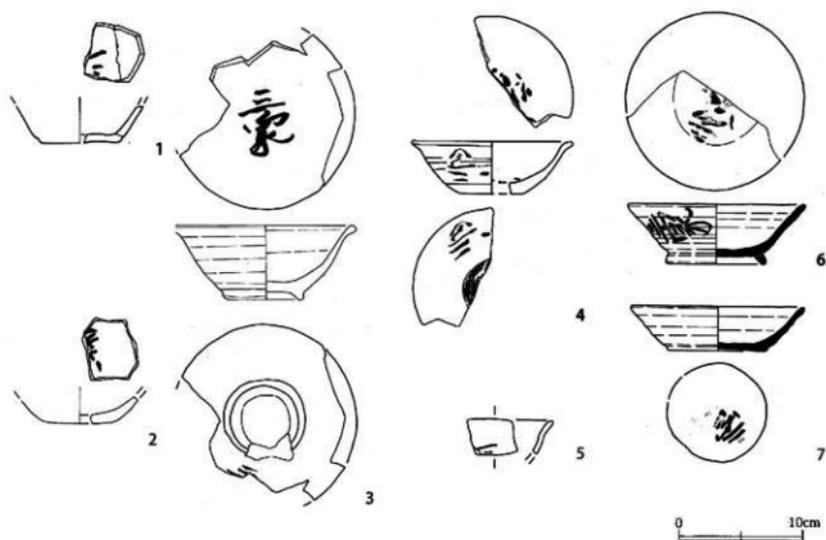


図2 長野原町林地地区出土「三家」関連墨書土器一覽

表 長野原町林地地区出土「三家」関連墨書土器一覽

遺跡名	出土遺構	時期	器種	器形	記入部位	方向	釈文	文献	備考
1	榎木Ⅱ 30号竪穴建物	10世紀前半	須恵器	坏	底部内面	—	「三」	1	
2	榎木Ⅱ 46号竪穴建物	10世紀前半	須恵器	坏	体部内面	—	「□家」	1	破片、「御家」カ
3	榎木Ⅱ 46号竪穴建物	10世紀前半	須恵器	椀	底部内面	—	「三家」	1	
4	榎木Ⅱ 6号焼土	10世紀前半	須恵器	坏	体部外面	倒位	「三」		
					底部内面	—	「三」	1	
5	榎木Ⅱ 遺構外	10世紀前半	須恵器	坏	体部外面	倒位	「三」		
6	中棚Ⅰ S101	9世紀中葉	須恵器	椀	外面体部	横	「三家」	2	
					内面底部	—	「三家」		
7	中棚Ⅰ S102	9世紀後半	須恵器	坏	外面底部	—	「三家」	2	

文献1 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008『榎木Ⅱ遺跡(1) 平安時代・中近世編 ハツタケム建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書第18集』

文献2 長野原町教育委員会編 2015『林地地区遺跡群 水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第1集』

るヤケを中心とする農業その他の王権の直接的経営の拠点として説明されることが多いが、ミヤケの理解をめぐっては、ミヤケの本質を土地所有の問題と捉えるかどうかで大きく二つの説に分かれると整理されている〔堀川 2015〕。

まず、平野邦雄氏はミヤケの構成要素としてタ(田)を基礎とし、「一定の領域を朝廷が排他的に占有するために設定された」とし、「土地に密着した概念」として理解する〔平野 1985〕。また、鎌田元一氏は「ミタを原型とし、田地、館舎・倉庫、耕作民を不可分な要素として成立した概念で、それが屯倉の本義」とし、平野氏と同様、ミヤケの本質をタ(田)と認めながら、「畿内のミタを原型としつつも、全国に拡大される過程で六世紀以後の段階では多様な機能をもって展開」し、外交施設などとする場合でも一定の領域的支配を前提として論じている〔鎌田 2001〕。

一方で館野和己氏は、ミヤケに田地を伴うものもあることを認めつつも、田地を伴わないものもあることから、稲穀を収取するための施設とは限らないこと、ミヤケの用字が様々であることを踏まえるべきとし、ミヤケを「クラ」としての機能に収斂させず、敬意を示す接頭語「ミ」+「ヤケ」の語であり、王権が各地に設置した「政治的軍事的拠点」と理解する〔館野 1978〕。館野氏は厳密な記紀批判の視点から崇神・仁徳朝の開発記事を否定し、従来捉えられていた5世紀以前の前期ミヤケの実在を否定した。また、仁藤敦史氏は、5世紀代の大規模倉庫群から考古学的に前期ミヤケの存在を証明することが困難であることなどから、前期ミヤケの存在やミヤケによる領域支配を想定する従来の通説を批判した。そのため6世紀以降の後期ミヤケを主眼に考察を行い、ミヤケの理解の前提となえるヤケの一般的性格に注目し、館野氏の説を踏まえたうえでミヤケの本質を特定した人間集団に対する「貢納奉仕の拠点」として捉える。〔仁藤 2012a・2012b〕。また、仁藤氏は東国においては後の国造にミヤケの経営を委任したと考えられるように、ミヤケの経営は在地首長層の協力がなければ不可能であったとする。

このように、ミヤケの本質をめぐる議論については、それを土地所有の問題として捉えて領域的支配を認めるか否かで展開してきたが、現在におけるミヤケの本質的な理解については、平野・鎌田説を批判的に継承した館野・仁藤説が親和的に受け止められているくらいがあり、一定の到達点にあると思われる。

6世紀以降のミヤケ設置の記事は『日本書紀』・『播磨国風土記』に記載され、ミヤケ制の画期を「安閑紀」に

おき、その新設をおおよそ推古朝までに終える。大化改新詔により、天皇の「子代之民」と「屯倉」、ついで皇太子奏により、天皇の「子代入部」、皇子の「御名入部」および「屯倉」の廃止が述べられ、皇太子自ら「入部五百廿四口、屯倉一百八十一所」を献上している(『日本書紀』大化2年(646)正月朔条・3月壬午条)。

このように、全国には少なくとも「一百八十一所」のミヤケがあったことから、『日本書紀』に具体的な記載があるミヤケ以外にも数多くのミヤケが全国に存在していたことが確かめられる。そのため、『日本書紀』に記載がないことがミヤケとして認定することを妨げるものではない。例えば、『日本書紀』に記載がないものの、ミヤケの設置がひろく認められている事例としては、後述の上毛野地域の「佐野三家」や、若狭のミヤケが挙げられる。若狭のミヤケについて述べてと、藤原宮跡・平城宮跡出土木簡のうち、若狭国小舟生評(遠敷郡)から進上された木簡のなかに「三家首」「三家人」「三宅人」といった氏族がいたことがわかる木簡が複数含まれている。このことから、若狭国小舟生評(遠敷郡)についても『日本書紀』にミヤケが設置された旨の記載はないが、塩あるいは海産物を確保するためのミヤケが設置されていたと考えられている〔狩野 1990〕・〔館野 2015〕。

上毛野地域のミヤケ 上毛野地域に関わるミヤケについては、『日本書紀』安閑2年5月庚寅条にみえる「上毛野国緑野屯倉」と、辛巳歳(681年)の銘を持つ山ノ上碑(高崎市山名町)に刻まれた「佐野三家」である。後者については、神亀3年(726)の銘を有する金井沢碑(高崎市根古屋町)に「三家子孫」9名の名前が刻まれており、関連が示唆される。なお、「佐野三家」については『日本書紀』にその記述はみえないが、尾崎喜左雄氏以来「佐野三家」をミヤケとして認めることは学界においてひろく認められている〔尾崎 1980〕。その他の上毛野地域のミヤケについては、唐澤保之氏がミヤケに関わる部民である田部に関連する文献史料・地名・墨書土器を集成のうえ考察を加えている〔唐澤 1991〕。吾妻地域に関する地名では、律令制下の吾妻郡の郷名として『倭名類聚抄』に「大田郷」、「上野国神名郷」の吾妻郡の項に「小不多明神」とみえることをはじめ、東吾妻町厚田・川戸、長野原町川原畑に「太田」・「大田」という地名が遺されていることから、他の部民の存在がほとんど知られていない吾妻郡や利根郡にまで田部が分布することが指摘されている。このように、吾妻郡内にミヤケに関わる地名が残されていることから、当地域にミヤケが設置されていた可能性をより強く示唆する。であるから、吾妻地域へのミヤケの設置が『日本書紀』などに

記述されていないことがすなわち吾妻地域にミヤケが設置されていないことを証左するものではなく、十分想定出来得ることだといえる。

もっとも、高島氏が既に注意を払ったように、元来「ミヤケ」という言葉は、首長居館や大規模施設を意味する「ヤケ」という語に尊称である「ミ＝御・美」の語が伴ったものであり、「ミヤケ」という語は元々普通名詞である。そのため、在地首長や地方官人の宅が「ミヤケ」して称された可能性を否定することはできないし、あるいは人名の一部として「三家」の文字が使用されている事例もあるため、「三家」という墨書土器が出土したからといってそれがすなわち大化前代に設置されたミヤケを意味すると解釈することには慎重にならざるを得ない。とはいえ、一可能性として、林地から出土した「三家」関連墨書土器を吾妻地域へのミヤケの設置、あるいはその遺存地名と考えることは十分できる。さらに、楡木Ⅱ遺跡 76号建物からは10世紀前半の年代観を有する須志器坏底部面に「県」と書かれた墨書土器も出土しているが、これを国造の下級組織の県、あるいはその首長の県稲置を指していると解釈し、ミヤケの管理者を意味すると推定することもできる。このことから、当地域へのミヤケの設置を傍証する資料として位置づけられる。

なお、ミヤケが具体的にどのような施設から構成されていたのかその実態は不明と言わざるを得ず、発掘調査遺構をもってミヤケに関わる遺構と認定するのは現段階では慎重になるべきである。林地において5世紀後半から6世紀前半の竪穴建物が数棟発見されているが、これをミヤケに関わる何らかの施設と位置づけることは建物構成・年代観の面からみてできない。

3. 6世紀～7世紀の吾妻地域について

林地出土の「三家」関連墨書土器が、ヤマト王権の政治的軍事的拠点、あるいは国造の支配領域に存立した部民制的貢納奉仕の拠点である、6世紀以降に設置された「後期ミヤケ」を意味している可能性を視野に入れた場合、吾妻地域における6世紀から7世紀にかけての動向が当然気になる。

『群馬県古墳総覧』によると、吾妻地域の古墳は289基を数える〔群馬県教育委員会編2017〕。そのうち吾妻渓谷以西については7基のみという僅少さに加えて、それらが古墳であるという確証はなく、古墳のほとんどが東吾妻地域、とりわけ吾妻川をはさんだ中之条盆地に集中している。東吾妻地域において、吾妻川右岸側には四戸・生原・川戸・下郷・金井・岩井・植葉・小泉と古

墳群が続く。左岸側には下之町・寺久保・小川古墳群が形成されており、5世紀代あるいは6世紀代の古墳を先がけとし、7世紀代に至るまでの経過をたどることが可能である〔中沢1979〕・〔諸田1998〕。そこで、本章では当該期の吾妻河流域に形成された古墳を中心に吾妻地域の歴史的展開を追うことにより、「三家」関連墨書土器の歴史的意義を考察したい。

5世紀後半以前 まず、5世紀後半以前の状況について述べておきたい。新井遺跡（東吾妻町厚田）で古墳時代前期に比定される方形周溝墓が検出されているが〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編2022〕、古墳については明確に当該期以前に比定されているものは存在していない。集落については、東吾妻地域において、川端・天神遺跡（中之条町中之条）では弥生時代から継続して営まれている集落が、四戸遺跡・四戸古墳群（東吾妻町三島）では弥生時代・古墳時代前期から後期にかけての集落が確認されている一方、西吾妻地域では極めて少ない。僅かに前述の長野原町林地地区の上原Ⅰ遺跡で確認されている古墳時代前期の竪穴建物に加え、嬭恋村今井東平遺跡で古墳時代前期と想定される甕が出土している事例に限られる。5世紀後半になると、これまで古墳がみられなかった吾妻地域に僅少ながら古墳が築造されるようになる。具体的には吾妻川左岸の机古墳（東吾妻町岩下円墳）と石の塔古墳（中之条町中之条 円墳 墳径径約18m）で竪穴式石椁を有する古墳が発見されている〔尾崎1971〕・〔杉山2008〕・〔石島2018〕。

6世紀 古墳の造営が比較的少なかった吾妻地域が飛躍的展開を遂げるのが、6世紀、特に初頭から前半期である。上毛野地域の横穴式石室の変遷を論じた右島和夫氏によると、所謂「初期横穴式石室」の成立段階に当たる。上毛野地域、今日の西・中毛地域では6世紀初頭ないし前半に横穴式石室が導入されるが、この導入時期については、関東地方においては最も早い段階であり、畿内との密接な関係が想定されている〔右島1994a・1994b〕、この時期になると、吾妻河流域でも古墳の造営が徐々に本格化する。渋川・吾妻地域の横穴式石室の導入について考察した深澤敦仁氏によると、当地域は、①群馬県地域内では横穴式石室の導入時期が早く、②導入開始段階に採用される横穴式石室は現状ですべて無袖横穴式石室であり、③導入開始期に変形石室が認められない、といった特徴があるという〔深澤敦仁2010・2022〕。このようにこの地域の横穴式石室には無袖横穴式石室が使用されるという特徴があるが、その要因としては、「前代からの渡来文化定着による受容」が挙げられている〔右島2003〕・〔深澤2010〕・〔若狭

D3号墳は6世紀代の方墳の可能性が指摘されている〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2022〕。吾妻地域では方墳の出土事例は稀少であるが、これらの方墳は馬生産と渡来系集団との関係で捉えることができるであろう〔右島 2003〕。

また、近年調査が行われた下郷古墳群 71号墳（楕円形墳 墳丘径約 11.6m）は吾妻地域の6世紀初頭の情勢を考えるうえで重要な古墳といえる。この古墳は無袖横穴式石室を有する楕円形墳で積石塚に付け基壇を設けており埴輪を伴う。本古墳は副葬品が充実しており、鉄製素環頭大刀・馬具轡一式・面繫の鉄地金銅張辻金具・琥珀などの玉類が良好に出土しており、畿内あるいは九州と直結した被葬者が想定されている〔東吾妻町教育委員会 2016〕。

このように、6世紀に吾妻川流域に古墳が成立する背景として、6世紀初頭頃の榛名山噴火（Hr-FA）により榛名山北東麓の地域が大打撃を受けたことは念頭に置くべきであろう〔右島 2020〕。近年当地域に豊富な見識をもたらした金井遺跡群は、大規模な馬生産に関わる拠点集落であることが明らかになった。その打撃から免れた対岸の黒井峯遺跡は6世紀初頭から前半にかけて飛躍的な展開を遂げることから、馬生産の拠点が榛名山北東麓から子持山南麓に移動したと推定され、さらにはちょうどその頃、利根川上流域や吾妻川流域でも古墳の造営が本格化するのである。平安期の史料になるが、『延喜式』左右馬寮御牧条には上野国の御牧として9ヶ所が挙げられており、そのうちに「市代牧」とみえる。この「市代牧」は現在の中之条町市城、東吾妻町新巻・奥田付近などを比定する考え方が有力で〔前澤 1995〕、吾妻郡に牧があったと推定される。近年の吾妻地域における豊富な発掘調査により、このような郡内における馬生産が6世紀初頭から前半に遡る可能性が十分に考えられる。

ところで、既述のように長野原町域における古墳時代の遺構は著しく稀少であるが、林地で当該期に属する竪穴建物や数棟確認されている。東吾妻地域で古墳造営が本格化した頃、林地に当該期の竪穴建物や数棟のみであっても確認されていることは、吾妻地域の東西交通を考えるうえで見逃せない。既に述べたように、これをミヤケに開く何らかの施設と捉えることは決してできないが、当地域が上毛野地域から鳥居峠を経てシノノ科野に至る交通路上に位置していることから、何らかの背景があり築かれた建物であることを考慮に入れておく必要がある。

7世紀 終末期になると、両袖型横穴式石室を有す

る古墳が一般的になる。当該期の古墳としては、まず四戸古墳群のうち両袖型横穴式石室を有するII号墳（円墳 墳丘径約 10.6m）が7世紀前半の古墳として挙げられる。また、近年行われた上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う発掘調査で、新たに四戸古墳群からいずれも両袖型横穴式石室を持つ古墳が3基発見された。1号墳が6世紀後半、2号墳が7世紀前半、3号墳が7世紀中頃に比定されている。このうち1号墳から発見された埴輪は藤岡産であることが解明されており当地域との結びつきが示唆される〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2020〕。また、唐堀遺跡では7世紀前半の両袖型横穴式石室を有する円墳（墳丘径約 18m）が発見されており、現状では調査が実施された吾妻地川右岸最西の古墳である〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2021〕。このほか、川戸古墳群の原町 42号墳（東吾妻町川戸）には玄門柱石を持つ自然石乱石積による両袖型横穴式石室が用いられており、終末期の特徴が現出していると位置づけられている〔諸田 1998〕。

7世紀の吾妻地域の動向について特筆されるのが、金井庵寺（東吾妻町金井）の造立である。上毛野地域でも僅少な白鳳期に属する寺院跡で、伽藍配置は詳らかではないが、南北約 160 m、東西約 110 mの規模の寺域と推定され、7世紀後半に創建され9世紀前半には廃絶したと考えられている。創建段階に用いられた1型単弁八葉軒丸瓦は上植木庵寺の創建段階瓦の直後統種であり、同一造瓦組織に基づく所産であると考えられている。そのほか瓦の製作地域の主体は不明瞭であるが、わずかながら対岸の中之条窯跡群の天代瓦窯跡（中之条町伊勢町）と碓氷郡の秋間窯跡群（安中市下秋間・中秋間）からの供給がみられる〔吾妻町教育委員会 1979〕。

さらに最近では、金井庵寺から南西に 1.2km の下郷古墳群で7世紀後半から8世紀初頭を中心とした複数の掘立柱建物と堀・門が検出されており、吾妻郡家やその前身の評家に関わるとみる意見もある〔群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2014〕。なお、対岸の天台瓦窯跡は8世紀前半から中頃にかけて操業し、その瓦は官衙などに供給されたと考えられている〔大江 1986〕。また、長元3年（1030）頃に作成された「上野国交替実録帳」こと不詳解由状案には「長田院」「伊参院」とみえるが、天神遺跡から多数の掘立柱建物と総柱式建物からなる奈良・平安時代の遺構群が検出されており、これを伊参郷に設置された郷倉院とみる意見も示されている〔前澤 2021〕。概してこのような経緯を経て、吾妻地域では律令体制下の吾妻郡が成立するのである。

以上雑駁ではあるが、主に6世紀から7世紀の吾妻

地域の歴史的展開を概観し、6世紀初頭に馬生産の担い手として台頭してきた地域に横穴式石室が導入されたこと、7世紀後半頃には白鳳期の寺院である金井庵寺が造立されたことから、山間部にありながら先進的な文化を取り入れた地域であることを述べた。6世紀初頭以降の飛躍的な地域展開の背景としてこの地に渡来系集団が存在していたことが挙げられるが、既に専論があることとミヤケの経営には渡来系集団が深く関与していることが指摘されており〔田中2002〕、ミヤケが列島各地に拡大した6世紀末から7世紀にかけて吾妻地域にもミヤケが設置されたとすれば、その経営にも渡来系集団が関与していることは十分想定できる。さらにいえば、こうした先進的な知識・技術を有する渡来系集団が地域経営に関与したことにより、7世紀後半頃に金井庵寺のような白鳳寺院を要するに至ったと考えられるのである。

おわりに

小稿では、長野原町林地地区から出土した「三家」関連墨書土器を手がかりに6世紀から7世紀の吾妻地域の動向を考察することを試みた。吾妻地域は6世紀初頭から飛躍的な地域展開を遂げるが、その理由として当地域が澁川地域の動向と関連して、6世紀初頭以降に馬生産の担い手として台頭してきたことが挙げられる。当該期は上毛野地域における横穴式石室の導入期に当たり、吾妻地域では無袖横穴式石室が集中的に取り入れられるが、このような石室形態は渡来系集団との関わりを示す可能性があり、この地域が渡来系集団を取り込みながら展開していったことを示唆するといえる。この点は近年の豊富な発掘調査事例により渡来系要素を窺わせる遺構・遺物が出土していることから裏づけられる。このように吾妻地域は6世紀初頭以降、渡来系要素が色濃くみえる地域であることが近年明らかになりつつあるが、ミヤケの経営には渡来系集団が深く関与していた可能性も考えられる。こうした吾妻地域の動向に際して5世紀末～6世紀初頭の榛名山大噴火(Hr-FA)で壊滅的な被害を受けた榛名山北東麓との関連に目を配る必要がある。また7世紀後半頃に白鳳期の本格的寺院と考えられる金井庵寺が造立されたように、6世紀から7世紀にかけて上毛野地域において山間部にありながら先進的な地域であったといえる。このように6世紀から7世紀にかけての吾妻地域の動向に目を向けることで当地域にミヤケが設置された可能性はますます高くなると考えられる。既に述べたように、墨書土器に表れる「三家」の語が地方官人や在地首長の居宅を指す「ミヤケ」として記された可能性を否定することはできないし、あるいは

人名の一部として「三家」の文字が使用されている事例もあるため、「三家」関連墨書がすなわち大化前代に設置されたミヤケを意味すると解釈することには慎重にならざるを得ない。とはいえ、ミヤケが列島各地に拡大した6世紀末から7世紀にかけて、上毛野とシノノ科野を結ぶ主要な東西交通路上に位置する当地域にミヤケが設置された可能性は十分考えられよう。出土地点や出土遺構を直接的にミヤケ関連施設として結びつけることは決してできないが、「三家」関連墨書土器は、大化前代の政治的軍事的拠点ないし貢納奉仕の拠点であるミヤケの遺称地を示すものとして、9世紀中葉・後半から10世紀前半にかけて当地域において文字として記されたものと解釈し得る資料なのである。

引用・参考文献

- 尾崎喜左 1971「西戸古墳群及び机古墳発掘調査報告」(岩島村誌編集委員会編『岩島村誌』)
- 尾崎喜左 1980『上野三碑の研究』尾崎先生著作刊行会
- 大江正行 1986『天台瓦竪跡』(群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編2』群馬県)
- 大谷宏治 2010「副葬品からみた無袖石室の位相—東海—関東を中心に—」(土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣)
- 狩野 久 1990『御食国と藤氏』(『日本古代の国家と都城』東京大学出版会、初出1970)
- 鎌田元一 2001「屯倉制の展開」(『律令公民制の研究』塙書房、初出1993)
- 唐澤保之 1991「古代群馬におけるミヤケの一考察—「田部」関係地名に着目して—」(群馬県立歴史博物館紀要)12
- 杉山秀宏 2008「吾妻地区最古の古墳—石ノ塔古墳について—」(群馬県地域文化)30
- 杉山秀宏 2020「西戸古墳群について」(『研究紀要』38、群馬県埋蔵文化財調査事業団)
- 関口功一 2013「古代吾妻郡の組成と性格」(『古代上毛野の地勢と信仰』岩田書院)
- 高島英之 2008「榎木Ⅱ遺跡出土の墨書土器」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『榎木Ⅱ遺跡(1)平安時代・中近世編 八ッ場ダム建設事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』)
- 高島英之 2013「山国の出土文字資料—上野国吾妻郡出土墨書土器から—」(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店)
- 高島英之 2021「墨書・刻書土器の動向から見た古代上野国吾妻郡の歴史的展開について」(『研究紀要』39、群馬県埋蔵文化財調査事業団)

- 高林真人 2015 「本調査における出土遺物および竪穴住居跡の変遷」(長野原町教育委員会編『林地区遺跡群』)
- 館野和己 1978 「屯倉制の成立」『日本史研究』190
- 館野和己 2015 「木簡から読む古代のふくい—新たに報告された木簡を中心に—」『福井県文書館研究紀要』12
- 田中史生 2002 「ミヤケの渡来人と地域社会」『日本歴史』646
- 富田孝彦 2011 「調査の成果と課題」(長野原町教育委員会編『林宮原遺跡Ⅱ』)
- 中沢 哲 1979 「中之条盆地における古墳の様相」(吾妻町教育委員会編『金井庵寺遺跡 町道 4-83 号線に伴う発掘調査』)
- 仁藤敦史 2012a 「古代王権とミヤケ制」(『古代王権と支配構造』吉川弘文館、初出 2005)
- 仁藤敦史 2012b 「古代王権と『後期ミヤケ』」(『古代王権と支配構造』吉川弘文館、初出 2009)
- 平野邦雄 1985 「六世紀の国家組織」(『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館)
- 深澤敦仁 2010 「上野」(土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣)
- 深澤敦仁 2022 「横穴式石室から窺う 6 世紀前半の群馬県渋川エリアのポテンシャル」(土生田純之先生退職記念事業会『人・協・社会—日本考古学から東アジア考古学へ—』雄山閣)
- 藤岡一雄 1981 「四戸古墳群」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編 3』群馬県)
- 堀川徹 2015 「ミヤケ制研究の射程—研究史の到達点と課題—」『史叢』92
- 松本浩一 1981 「石の塔古墳」(群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編 3』、群馬県)
- 前澤和之 1995 「上野国馬と牧」(高橋富雄編『馬の文化叢書第 2 巻 古代』馬事文化財団、初出 1991)
- 前澤和之 2021 「『上野国交替実録帳』と地方政治」(『上野国交替実録帳と古代社会』同成社、初出 1991)
- 右島和夫 1994a 「上野の初期横穴式石室の研究」(『東国古墳時代の研究』学生社、初出 1983)
- 右島和夫 1994b 「上野国における横穴式石室の変遷」(『東国古墳時代の研究』学生社)
- 右島和夫 2003 「上野地域における方墳の系譜と馬一岩下清水古墳群をめぐって—」(土生田純之編『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』専修大学文学部)
- 右島和夫 2018 「机古墳」(『群馬の古墳物語』下巻、上毛新聞社)
- 右島和夫 2020 「四戸の古墳群の成立背景」(群馬県埋蔵文化財調査事業団編『四戸の古墳群 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』)
- 諸田康成 1998 「吾妻郡」(群馬県古墳時代研究会『群馬県内の横穴式石室 I (西毛編)』)
- 若狭 徹 2015 「東国から読み解く古墳時代」吉川弘文館
- 吾妻町教育委員会編 1979 「金井庵寺遺跡 町道 4-83 号線に伴う発掘調査」
- 群馬県教育委員会編 2017 『群馬県古墳総覧』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008 『検本Ⅱ遺跡(1)平安時代・中近世編 八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2014 「下郷古墳群(郡) 3.4.5 原町駅南口線外 1 線社会資本整備総合交付金(活力基盤)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2020 「四戸の古墳群 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2021 「唐塚遺跡(1)—古墳時代以降編— 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2022 「新井遺跡 上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 長野原町教育委員会編 1990 「長野原町の遺跡 町内遺跡詳細分布調査報告書」
- 長野原町教育委員会編 2015 「林地区遺跡群 水源地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集」
- 東吾妻町教育委員会編 2016 「下郷古墳群 71 号墳」

(付記) 本稿の作成に際し、高島英之氏から多大なるご教示を得た。この場を借りて御礼申し上げる。

(たかはし とむ 長野原町やんば夫明記流ミュージアム学芸員)

麻づくりの生活史

一元「岩島麻」農家の古老の聞き取りから

藤野麻子

はじめに

「霧下に見るや麻干す家百軒」……。この句は、長野原町林地区出身の神宮で町長も務めた浦野安が、昭和10年頃の生まれ故郷の風景を詠んだものである⁽¹⁾。

ここでいう「麻」とは大麻(hemp)のことであり、現在の東吾妻町・長野原町を含む吾妻地域一帯は、古くから繊維を取るための大麻の生産が盛んな地域であった。当時の林地区の戸数が約100戸であることから、ほぼすべての家が麻の生産に携わっていたことを表した句であるといえよう。

然しながら、生業としての大麻生産は昭和30～40年代前半にかけて完全に姿を消したため、この句のような光景を実際に見たことのある人はおよそ70代以上の世代に限られるようになってしまった。当地でそうした生業があったことを知らない人のほうが多くなっているばかりか、大麻に対するネガティブなイメージが浸透し、「大麻なんて栽培して大丈夫だったの？」という反応が返ってくることもある。

現在、群馬県内では唯一、東吾妻町岩島地区(大字三島)を拠点とする「岩島麻保存会」が、大麻の栽培免許を取得し、精麻技術を後世に伝えるための活動を続けている。私は、令和3年度より当会に在籍する古老メンバーへの聞き取りを進めると同時に、4年度からは当会の通年の活動にも参加し、作業体験も含めて、今では幻の生業となってしまった吾妻の麻づくりとはどういったものであったのかを調査している。

本稿では、当地域の麻づくりの歴史の概略と、「岩島麻」を代名詞とする精麻が作られるまでの工程を踏まえた上で、10代の頃に家業として麻づくりに携わった4名の古老からの聞き取りをもとに、麻づくりという産業あるいは文化が地域や個人にどのような影響を与えてきたのかを記録、考察してみたい。

1. 史料に残る吾妻の麻づくりの歴史

ここでは吾妻地域の麻生産の中世から大正期までの歴史の概略を、史料をもとに振り返る。

吾妻地域でいつから大麻の栽培が行われてきたのかを示す資料は見つからないが、「加沢記」に記されている岩櫃城落城の記事にオガラ(麻がら)が出てくることなどから、少なくとも16世紀にはある程度麻の生産が行われていたと考えられている⁽²⁾。17世紀半ば、真田氏の統治下では麻の自由な売買が許され、綱麻を上納することで畑年貢代金から差し引かれるといった貢租としての麻の収納が始まる。

江戸中期になると市町商人の活躍が目立つようになり、米・塩・肥料などを取り扱う問屋が、繭や煙草などとともに麻の荷主として、江戸および越中への出荷を取り仕切った。18世紀中頃からは加部安左衛門を代表とする在村荷主が本格的な集荷活動を行うようになる。

さらに19世紀に入ると、これらの荷主と生産者を結ぶ仲買商人が台頭し、岩下村の片貝家、郷原村の菅谷家などが、それぞれ江戸向け・越中越後向けに活発に荷出しを行なった。この当時の麻の活発な取引を裏付ける証拠が、かつて吾妻峡の道隆峠にあった「樽沢の磨崖碑」(弘化3年、元治元年)に記された寄進者名に見てとれる⁽³⁾。この頃、東西吾妻を結ぶ交通は吾妻峡の断崖絶壁に阻まれ、大幅な迂回を強いられていたが、そこに最短ルートとなる峠道を掘削すべく中心的に寄進を行ったのが、片貝家・菅谷家ほか地元「麻買仲間」であった。地形から見ても工事には相当の時間と費用がかかったものと考えられるが、現在も東京・高崎方面と信越地



岩島地区に現存するネド小屋

方を結ぶルートのひとつとなっている吾妻峡左岸を走る国道の始まりともいえる開削が、麻の出荷を契機としていたことは、もっと知られてもよい史実であろう。

明治10年の『吾妻郡村誌』には、町村別の産物として麻の生産額が記されており、おおよその当時の生産状況を把握することができる⁽⁴⁾が、このなかで三島村（現東吾妻町三島）について「本村をもって本場と称し全部の内冠たる者とす」と特に強調されているように、当時から当村の生産量が群を抜いていたことがわかる。また、この頃の出荷先および用途としては、上・中等品は越中・越後に行き越後上布・越後縮などの織物となり、下等品は東京に卸され魚網・烏網・鼻緒・草履裏などの日用品となったようである⁽⁵⁾。

明治37年にはのちに設立される「岩島麻組合」の前身となる「有限責任産産共同購買組合」が三島地区に設立され、44年から大麻販売を開始。45年には品質の統一を図り、価格変動の弊害を改善するため、最優等（吾妻錦）から優等（黄金）・一等（満月）・二等（山吹）・三等（黄鳥）・等外（紅葉）まで品質呼称を定めた。大正7年からは組合員を吾妻郡一円とし、組合員数も600人近くに増大し、大正期から昭和初期にかけて吾妻の麻生産はピークを迎えることとなる。

2. 岩島の精麻の工程と特徴

繊維にするための麻づくりと一言でいっても、用途や利用法によって、栽培から加工までの手順は異なる。

本稿が取り上げる「岩島麻」とは、古くから一貫して上質な糸や弓の原料となる「精麻」として生産・加工・出荷されてきたものを指す⁽⁶⁾。色や光沢にすぐれ、か

つ強靱な性質があることから、織物や弓弦の原料として重宝され、全国有数の上質麻の代名詞と言われてきた。

麻（精麻）づくりがその他の農作物の生産・出荷と大きく異なる点は、一連の作業の工程のうち麻挽きと呼ばれる「加工」のパートが占める重要性が高く、その技術こそが作物の仕上がりが、すなわち商品となる際の価格に大きく関わってくるということである。

「岩島麻」の栽培から加工までの工程について、詳しく述べるには紙幅が足りずここでは避けるが、簡単にまとめたものが図1である。

「岩島麻」には、よい麻をつくる条件として「1から、2ねど、3ひき」という教えがある。「から」とはおおもととなる植物としての大麻の茎を指し、畑を整え良い生麻をつくること、次に麻を発酵させる場である「ねど」の温度管理や時間に気を配ること、そして最後の仕上げとなる「麻挽き」と呼ばれる精製加工の技術を磨くこと、の3点を表している。この教えは、このあと取り上げる古老たちの聞き取りのなかでもしばしば口にされたほか、現在の「岩島麻保存会」の活動のなかにも引き継がれ、良質な麻をつくり続けようというプライドの基盤となっている。

3. 聞き取りから振り返る麻農家の生活史

ここから先は、冒頭で触れたとおり、生業としての麻の栽培と加工を経験した古老たちへの聞き取りを通して、麻づくりという地域の伝統産業と一個人や共同体との関わりをたどってみる。

プライバシー保護の観点から個人名は伏せるが、4名の生まれ年と令和5年時点の年齢は次のとおり。MSさ

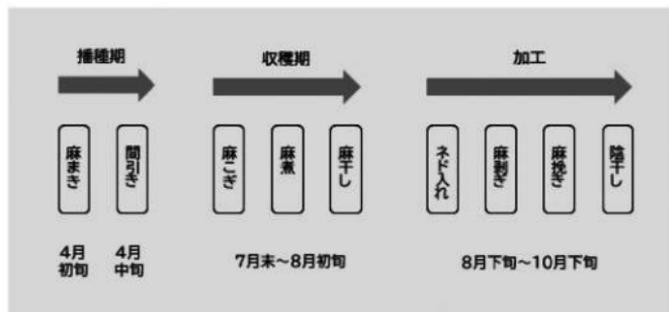


図1 「岩島麻」栽培から加工までの工程

ん（昭和3年／95歳）、KKさん（昭和4年／94歳）、KIさん（昭和16年／82歳）、KHさん（昭和12年／86歳）。

（1）麻づくりの作業

まず地区一帯で麻の生産が盛んだった昭和初期頃の麻農家の一年の作業について聞いたことを、作業に沿って書き出してみる。

a. 播種（麻まき）

「この地区のほとんどの農家が麻とお蚕。お蚕は春の一回きり。夏から秋は麻が忙しから」（KI）

「麻まきは昔は4月10日と決まっていた。今みたいに播種機なんかなくて、30センチのサクを作ったら手で種まいてそこに土かけて。俺んちはだいたい1反5畝から2反歩。それこそものすごく疲れる仕事。だから『麻まき粥』っていつてね、種まきの日はお粥を食べた」（KK）

「種まいてほしい10日経つと生えてくる。間引きは1～2回。うんと太いのや小さいのを間引く。中耕は細い桑で1回入れる。あとは（大風などの）障害がなければ麻こぎ（収穫）まで手はかからない」（KK）

ここまででまず興味深い点としては、岩島地区では養蚕が春蚕のみであったということである。麻と養蚕の兼業は昭和中期までの吾妻地域の農家の一般的なスタイルと言えるが、長野原町内では春に加えて夏、家によっては秋を入れた年3回の養蚕を行っていた事例と比べて、当地区での生業における麻の比重の大きいことがわかる。言い換えれば、品質の良い麻が取れることから、そちらに手間と時間をかけるほうが経済的にもメリットがあったということであろう。

麻は、4月下旬に間引きさえしてしまえば、あとは7月下旬までの3ヶ月間、特別に手をかける必要がない。そのため、5月中旬から7月中旬にかけての春蚕の作業や7月の麦の収穫時期とは重ならず、都合がよかったようである。

b. 収穫（麻こぎ）～麻干し

「麻こぎの時期は7月下旬から8月初め。4月10日にまいて7月20日であらう100日だ。俺んちはだいたい7月30日か8月1日くらい。こいで（抜いて）煮たあと10日間干さないといけなんだけど、これとお盆の前に干し終わるから。で、麻の終わった畑に蕎麦をまいてお盆を迎える。こくのはおんしょうも子供も家族みんなで1日中やった」（KK）

「こくのは大人数の家は4～5人でやって、こいだあ

とは切る人と煮る人に分かれてやった。親父とふたりだけでやるときなんかは1週間かかった。こいだ分はその日のうちに煮て干さないといけなから夜までやった」（MS）

「昔は『30日オヤ』っていう小屋が畑のそばにあった。束にしたものを昼間は外に干して、夜はオヤにしまっつてのを10日間やる。干してるときに雨に濡れるとカビがついていい麻にならねえ。だから夕立がくりゃあ子供だつて走って行って、他の家のだつてなんだつてぜんぶ取り込んでね。干したり仕舞ったりは子供もよく手伝った」（KK）

収穫後にいったん煮た麻を10日間干す「麻干し」が、天気の変化を見ながらの気を使う工程であったことが、それぞれの口ぶりから感じられる。今回聞き取りをした以外の、長野原町内の高齢の人たちからも、「上部を縛って裾を丸く広げて干しているオガラのなかでかくれんぼをした」「川に泳ぎに行っていて雨が降り出すと麻畑に飛んで行った」という話がしばしば聞かれ、幼少期の故郷の夏の初めの光景として共通の思い出となっているようである。

c. 加工（ねど入れ・麻剥ぎ・麻挽き）

盆を過ぎて一息つくと、いよいよ麻づくりの要、麻挽きのシーズンが始まる。

「8月20日頃から麻を挽き始めて、11月3日が地元のお祭りだからそれより1週間くらい前までに挽き終わる。麻挽きが終わって蕎麦を刈ると神社のお祭り…というのがパターンだな」（KK）

「麻挽きが始めると2ヶ月近くほとんど毎日挽く。朝起きて朝飯前に挽き始めて、夜も暗くなるまで。今日挽くぶんはおとといネドグラに入っちゃってるんだからさぼれない」（MS）

「もし昼間だけ遊びに来たりして1時間さぼったら、夜また1時間余計に挽かなくちゃ。親の世代の話だけど、デートに行きたいからってその日の分を緑の下に捨てて



麻こぎ（収穫）

いったんなんてももある(笑)(KI)

干して保管しておいた麻をもう一度煮て(上げ湯)、そこから1日に剥いで挽ける分ずつ「ねど」に入れ、2～3日発酵させる。発酵が適度に進むと表皮がずると剥げるが、発酵具合が足りないと「渋く」なり、進み過ぎると「寝過ぎ」となり、どちらも作業のしやすさや仕上がりに影響する。前述した3つの教えに含まれるとおり、「ねど」は経験と勘がものを言う繊細な工程であり、一度発酵させてしまったものは人の都合で止めることができないため、聞き取りにあるような時間との勝負となるのである。「ねど」に麻が入っている限り、身内に不幸があっても作業をとめられず、遊び盛りの10代の頃に、2ヶ月間来る日も来る日も決められた量に追われる毎日は辛かった、という話も聞かれた。

d. 荷出し

加工した精麻をどのように出荷していたかについては、祖父の代まで問屋をしていたKH氏の証言が詳しい。「じいさんの頃までは個々の農家が問屋と仲買を通して売っていた。仲買は千葉や越後越前のほうから買いに来る人を連れて各農家を見て回って商談する。その頃は、麻挽きの時期になるとたくさんの人が村に出入りしていた。そのための旅館もあったし、俺んちみたいな問屋の家にも泊まらせた。戦争があって統制になったりして、そのあとは農協ができたから、問屋業も親父の若い頃で終わった」(KH)

麻の売り買いにともない、時期が来ると小さな集落に村外から多くの人が訪れたというのも、一般の農村とは異なる麻の産地ならではの特色であったといえる。昭和4年、岩島地区内だけで問屋がKH氏宅を含め6軒、仲

買が9人いたという記録¹⁰⁾から、江戸時代から続く「麻買商人」の流通業が昭和初期にかけても盛んだったことがわかる。

今回、話を聞いた古老たちが出荷していたのはおもに、戦後の岩島農業協同組合ができてからである。

「農協には製品に応じて8つの階級があった(金・銀・銅・甲・乙・丙・一等・二等・三等)。農協の人が審査する。俺も一回だけ金を取ったことがあるよ」(KI)

(2) 麻づくりと地域

a. 畑作の2年4輪作

麻を主に栽培していた頃の吾妻地域の農家の農事暦については、天明の噴火に関する調査のなかでも報告されている¹⁸⁾が、今回の聞き取りからも昭和の中頃までの岩島地区の畑地利用の特徴が見えてきた。

「麻をつくる畑は一年おきになる。連作がだめということではなく、麦や蕎麦などの作物との関係でそうなる。麻を収穫し終わった畑にはすぐお盆前までに蕎麦を撒く。その蕎麦がだいたい生え揃う9月末頃に「ナカイレ」といってサクの間に麦を撒く。蕎麦は11月に収穫するが、ナカイレした麦は翌年の6月まで畑にあるから2年周期となる」(KI)

この話に粟・稗・黍などの雑穀類を加えた畑地利用のスケジュールをまとめると図2のようになる。この「2年4輪作」が当地区の一般的な農法であった。換金作物としての麻を中心に、生活に必要な麦・蕎麦・雑穀類を無駄なく効率的に循環させているところに、稲作に不適な山間部ならではの知恵を見て取れる。

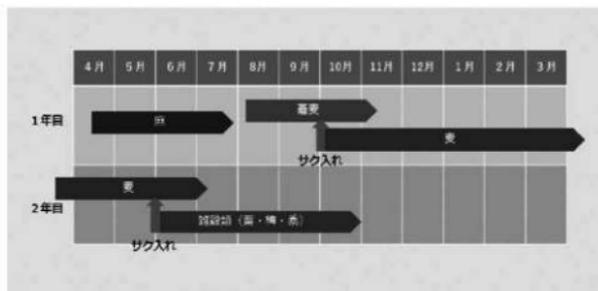


図2 畑地の2年4輪作

b. 地域共同体としての連携

この畑地利用にはさらに、個々の農家単位ではなく地域全体の連携が欠かせなかったことが、次の証言からわかる。

「麻畑は一年おきに、(地区の真ん中を通る)道を境に、今年は道上、翌年は道下とみんなで揃えてやった。麻畑っていうのはぼつんとひとつだけあると、風が当たったり鳥にやられたりしてだめなんだ。だからなるべく密集させて際(きや)をつくらないようにやる」(KK)

生産から出荷までは各農家で独立した営農でありながら、地域全体としての収量の増加と安定のため、一年おきとなる麻畑のエリアを近隣で統一する。いつからこうした手法を取られていたのかは不明だが、この緩やかな共同体としての連携が、岩島が麻の一大産地となったことと無縁ではないだろう。

(3) 麻づくりと家族・師弟関係

a. ジェンダーの役割

麻づくりの作業は家族総出で行われるが、工程によってジェンダーの役割がはっきりと分かれているのが特徴的である。

「いつからかはわからんがここは昔から、麻を剥くのは女、挽くのは男って決まっている。なかには女の人でも上手に挽く人も何人かはいたが」(KK)

麻剥きが女性、麻挽きが男性の仕事であることは、全国的にそのような習慣があった訳ではなく(栃木の野州麻ではそれが逆になる⁽⁹⁾)、岩島麻に限った例であるようだ。その理由は古老たちにもわからないようだったが、丈が約190センチと他地域に比べて長く、弓の材料になるほど強靱な性質を持つ岩島麻を挽くには、小柄で力の弱い女性には不向きだったからではないだろうか。剥ぎ手と挽き手の間(通常は夫婦や親子など)にも阿吽の呼吸が必要であり、「うまく行くときはいいが、喧嘩を

しているときなどは出来の悪さをお互いのせいにして大変だった」という一家総出で行う家業ならではの苦労話も聞かれた。

b. 師弟制

「昔の人はあっちこっち麻挽きしてるとこあるから弟子入りしたんだ。2束持って行ってそれを挽いたら帰ってきて昼飯食べた。それを3年くれえだ。だけど行ったらってこうすりゃいいなんて教えてくれない。ただあの人はどうに挽いてる、この人はこうに挽いてるって見て、自分で挽いてくるだけ」(KI)

「親父から『あそこんち行って見てこい』って言われる。元のほうの“かしら”を挽くのは誰々が上手だとか、尻のほうは誰々の親父さんがうまいからって、いいとこいいとこ習いに行って。だけど行ってただ見るだけ。教えてはくれないんだから。3年で一人前かな」(MS)

今話を聞いた4人のうち3人は代々が麻農家で、親から引き継ぐかたちで麻づくりに携わっている。仕上げの加工となる麻挽きを始めるのは、中学を出て16、7歳の頃。挽き初めの数年は、親からではなく、地域内の「名人」のところで弟子入りのようなかたちで通いながら見様見真似で覚えるというのが通例であったようである。これも、農業でありながら工芸としての側面を持ち合わせる麻づくりならではの慣習として興味深く、畑地の連携使用と同じく地域内で同一産業を行う共同体としての協力関係と意識の高さを窺える。

(4) 生業としての麻づくりの終焉

a. 麻づくりと戦争

現在90歳前後の古老たちが10代の半ば、麻挽きに精を出すようになり数年も経たない頃、麻づくりも戦争の影響を受け始める。昭和14年、麻は統制となり個人の自由な売買はできなくなったが、太平洋戦争が始ま



麻挽き



麻剥ぎ (※筆者が体験した時の様子)

りマニラ麻の輸入が途絶えると国内では深刻な麻不足となり、国策として麻の生産が奨励されるようになる⁽¹⁰⁾。

「このあたりは戦争で被害を受けることもなく、むしろ麻づくりが忙しくなった」(MS) という証言のとおり、この頃の麻づくりはかえって戦争特需の影響を受けている。

戦後は、昭和20年にGHQにより大麻栽培が全面的に禁止されるも、22年の「大麻取締規則」により解除、翌23年に現行の「大麻取締法」が制定され麻の栽培が免許制となるなど、麻づくりを巡る動きが複雑化し、生産者も振り回されることになる。これによりなんらかのダメージを受けたものと考えたが、

「特になんも変わらねえ。漁業の漁網や釣糸をつくる工場もできて、千葉のほうに送って、一時期は儲かったみたいだな」とのMS氏のコメントを筆頭に、ほかの回答からも、岩島においては大麻取締法やそれともなう免許制度自体が麻づくりの衰退に影響を与えたものではないことがわかった。

b. 生業としての麻づくりの終焉

戦後も地区の主要な産業であり続けた岩島の麻だが、昭和30年前後からの化学繊維の普及による大波からは逃れることができなかった。

「ある頃急に、麻協に出しても売れ残るようになった。出荷した麻の半分が売れなかった。いちばんの消費先の魚網がごろりと化繊(ナイロン)に変わったから。それが続くようになって、売れねえ麻つくってもしょうがないからって、コンニャクになった」(KI)

「売れなくなっても弓の材料には必要だから良いものは売れたよ。ほかが少しずつよすようになってもうちは続けてたが、昭和46年に親父が死んだからそれでよしした。48年くらいでみーんなばたりと終わったんじやねえか」(MS)

昭和35年に岩島農業協同組合の加工場は閉鎖、54年には唯一精麻加工を続けていた1軒がやめ、ここで事実上、生業としての岩島の麻づくりは終焉を迎えることとなる。

一級品としてのプライドを持って続けてきた麻の生産・加工をやめることについて、迷いや心残りはなかったのかと尋ねてみたが、一様に「しかたがねえから」という答えであった。ちょうど家族を持ち、一家を支えていかなければいけない壮年期を迎えていた彼らにとっては、「伝統」よりも、新たな生活の柱を見つけることが優先されたのは当然のことである。

c. 岩島麻のその後

その後の「岩島麻」は、文化財保護の観点や神事で使用する精麻を必要とする神社庁からの求めなどもあり、昭和41年「大麻保存協議会」が、昭和54年に「岩島麻保存会」が設立され、地域の伝統文化としての麻づくりは存続されることとなった。毎年欠かさず行われる麻の栽培から加工に加えて、国内外への精麻技術の指導や、平成2年には平成の天皇即位にともなう大嘗祭への協力を行う等の活動が評価され、平成4年には群馬県選定保存技術第1号にも認定された。今回話を聞かせていただいた4名は、当会の設立当初からのメンバーであり、50余年にわたって「伝承者」としての役割を果たしている。10代で家業として関わって以来およそ80年、麻づくりは常に彼らの人生と共にあり続けているのである。



麻づくりの道具 (展示：やんは天明泥流ミュージアム)

おわりに

ここまで、元麻農家であった古老たちへの聞き取りをもとに、(1)栽培から加工・出荷までの作業工程、(2)地域共同体との関わり、(3)家族内や師弟との関係、(4)戦争を挟む時代の移り変わりとの関係といったテーマごとに、吾妻・岩島地区に伝わる麻づくりについて取り上げた。小稿を「生活史」と題したのは、当地域における本業が個人に与えた影響は少なくなかっただろうという仮定をもとに、地域産業史・農政史としてではなく、一個人の視点から見た麻づくりというものを探り、記録したかったからである。そのため、本文内でも語り手本人の口調や言い回しをなるべくそのまま表すことに努めた。

(1)で語られる各工程の作業方法については、実際にはもっと詳細な手順や手業についても聞かせてもらったのであるが、ここでは全体像をつかむために一部の証

言を取り上げるだけに留めた。そうした技術に関する細かな記憶は、実体験を通して「岩島麻保存会」内で彼らから若い世代へと継承されていることに希望を感じるとともに、彼らの健在なうちにさらなる聞き取りと記録の作成を急ぐことも必要であると考えた。

また(2)(3)に関する証言から見えてくるのは、近世あるいは中世から伝わる麻づくりという農業を、途切れることなく受け継いできたというだけでなく、「岩島麻は全国随一の上質な麻である」という誇りを各農家が自認し、個人の技術向上や地域全体の連携を通して製品の質に拘り続けてきたという点である。「麻で食っていた」時代から半世紀以上が過ぎても、彼らの言葉の随所に麻づくりへのプライドや情熱ともいえる想いを感じる場面が多々あった。であるがゆえに、数百年間、吾妻地域に連鎖と受け継がれてきた大麻という農作物と地域住民との関わりが、高度成長期以降のわずかの6～70年の変化のなかで消滅し、人々の記憶からも失われてしまうということに、強い危機感と焦燥感を覚えずにはいられない。

なお、聞き取りインタビューは数回にわたって作業の間等に行ったため、聞き直してみると重複する点や、逆にもっと掘り下げるべき点が抜け落ちているなど聞き手側の不備や未熟さが多く見られる。それについては今後も同じテーマでの聞き取り調査を続けるなかで補完していきたいと考えている。

最後に、本稿の執筆にあたり、聞き取りにご協力いただいた4氏をはじめ、海野信義会長をはじめとする「岩島麻保存会」会員各氏、東吾妻町教育委員会の吉田智哉氏にご協力をいただいた。記して、感謝いたします。

註

- 1) 文献3
- 2) 文献10
- 3) 文献4
- 4) 中之条町以西の吾妻川沿いの村々が麻・麻布を特産物として生産額をあげているが、「大柏木村:麻 2500 貫」「林村:麻 1500 貫」等のなかで、「三島村:麻 6321 貫」と群を抜いている。
- 5) 文献1
- 6) 大麻の繊維には「精麻」のほか、皮を剥いただけの「皮麻」(ひま・かわそ)があり、良質な麻の取れない地域では皮麻が作られた。
- 7) 文献6
- 8) 文献12
- 9) 文献14
- 10) 群馬県経済部が昭和18年頃発行した「大麻栽培要綱」(長

野原町羽根尾区有文書 613) 前文にも、「政府は本年度大規模の増産を計画せり、本県に於ても国策に順応し之が増産を奨励しその生産確保を期す次第である」とある。

文献

1. 丸橋勝太郎『櫻木大麻製造実験略記』1893
2. 吾妻麻信用購買販売利用組合『吾妻麻一斑』1928
3. 浦野安『吾妻渓谷探勝記』1936
4. 吾妻町『原町史』1960
5. 萩原進『あがつま史稿』西毛新聞社 1973(増訂再版)
6. 群馬県教育委員会『岩島の麻』(群馬県無形文化財緊急調査報告書)1978
7. 群馬県『群馬県史 資料編11巻』1980
8. 中之条地域行政推進会議『岩島地区に於ける大麻生産に関する調査』1982
9. 長野原町『長野原町の民俗』(ハッダムダム永設地域民俗文化財調査報告書)1987
10. 群馬県『群馬県史 通史編5巻』1991
11. 丸山不二夫『全国に広まった上州岩島の精麻を追って』2002
12. 関俊明『浅間山大噴火の爪痕 天明三年浅間災害遺跡』新泉社 2010
13. 大麻博物館『大麻という農作物 日本人の営みを支えてきた植物とその危機』2017
14. 倉井耕一他『地域資源を活かす 生活工芸双書 大麻』農文協 2019
15. 東吾妻町教育委員会『岩島の麻栽培と精麻技術—群馬県選定保存技術』
16. 東吾妻町教育委員会『岩島の麻栽培と精麻生産—岩島麻保存会』2021

(ふじの あさこ 長野原町やんば天明記流ミュージアム学芸員)

〔注8〕伊勢崎藩領、天明三年当時藩主は酒井忠温（さかいただはる）

〔注9〕「川島村絵図」 渋川市教育委員会所蔵 渋川市北碓歴史資料館企画展「浅間山大噴火―泥流に流された村―」展示図録 2021

〔注10〕「注2」第Ⅱ巻P112\115

〔注11〕「注2」Ⅳ巻P340、れいせん川原は前橋城の南端

〔注12〕「中村遺跡」（渋川市教育委員会発掘調査報告書1） 渋川市教育委員会 1986

〔注13〕渋川市指定天然記念物

〔注14〕中村区有文書 「渋川市誌第5巻歴史資料編 口絵」 渋川市誌編さん委員会 1989

〔注15〕「注2」第Ⅱ巻P292\302

〔注16〕現前橋市前橋陣屋の南にあたり当時は吏政問所が設けられていた。「吏政」の標記は原本に従い、本文・地図では「吏政」を用いた。

〔注17〕小諸市美斉津沢氏蔵 やんば天明泥流ミュージアム保管 「やんば天明泥流ミュージアム常設展示図録」2021

〔注18〕現群馬県吾妻郡中之条町

当報告作成にあたり、渋川市教育委員会屋野諒太氏、川島村名主文書の整理・解説に取り組んでいる唐澤保之氏に多大なるご支援とご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

（ふるさわ） かつゆき 長野原町やんば天明泥流ミュージアム館長

の人や馬が難を逃れた記録はこの地区での被害と避難の様子を生々しく伝えている。利根川右岸の現在の関越自動車道沿川伊香保IC周辺の村落である。関越自動車道建設に伴う発掘調査では、4mにも及ぶ泥流の下から青々とした大豆や、桑、昆虫をはじめ多くの遺物がみつかった地域である。(注12) また、この時見つけた幅10m、高さ4mをこえる溶岩塊も現在、渋川市武道館の駐車場一角に移設保存されている。注13。この付近は利根川の川幅が広く、左岸はがけで泥流の行き場がなく、榛名山西斜面の緩やかに傾斜している中村を襲った泥流が川越藩領だけでも村高三七七石の内四分の三以上にあたる二四五石余を埋め尽くした。この状況は中村区有文書の「中村泥入り絵図」に描かれている(注14)。

このように大きな被害を受けた中村で川島村の一〇〇人も人が救助されたのは川幅が広くゆるやかな傾斜地を泥流が比較的緩やかに広がっていったこと、多くの人が危険を顧みず村人の救助にあたり、救出された人のなかに川島村の人と混じっていたことが予想される。また、救助された人が隣村の石原村や渋川村の村民の世話になったことは救出したものの自身も被災し世話ができなかった中村の村人がいたことがわかる。

当時、高崎在住の女性俳人羽鳥一紅が記した「文月浅間記」(注15)には前橋の実政(注16)が付近の様子として、助けを求める被災者に綱を投げたり、長い縄を投げたりして何とかして助けようとする人々の様子が記され、他にもいくつかの資料に、泥流に踏み込むことが出来なかったため、竹で筏を組んで救出に向かったことが記されている。また、「浅間山焼岩之記」(注17)には挿絵の中に幸手宿(現埼玉県幸手市)付近を流れる権現堂川の様子があり、竹竿をたして救助しようとする人、船を出すために反網を解こうとする人、着物を脱ぎ捨てて川に入ろうとする人の姿、声を出して勇気づける人がえがかれている。中村をはじめ吾妻川や利根川、現在の江戸川のいたる所で川治いの村人のこのような救助活動があり、泥流に流された人たちが助け出されたのであろう。

終わりに

救出された川島村の人をテーマに被災者の救出についてのべてきたが、二つの史料に記載されている一九人は下流で救助され生還したことが確実である。

これまで「史料集成」所載の史料で救出された人のことが記載されているのは、吾妻川の川幅が広がりや流れが緩やかになる現在の中之条町(注18)付近より下流の村であるが、一村での生還者としては川島村の一九人が最大である。また、川島村のほとんどの人が川幅が広がり流れが緩やかになった利根川合流地点より下流で救出されている。

「史料集成」所載の古記録の中には被災者を救助したくても泥流が熱くて踏み込みできなかったと記されているものもある。泥流の中には巨大な溶岩塊が含まれその周辺が高温になっていたと考えられるが、下流で助けられた人がいたことからわかることは、泥流のほとんどの部分が常温であったことである。

冒頭でも述べたが、救出された人々は「史料集成」所載の史料だけでも他にも記載されている。しかし、同じ記事が異なる村のことと記載されたり、「風聞」または「聞き書き」として記載されているものがあるので、複数の資料の比較研究が必要である。救出された人の調査研究として、確実な史料が残された川島村を取り上げたが、今後、他の村での救出された人の事例、被災者の救出に取り組んだ村や人の記録について調査研究を継続して行きたいと考えている。

(注1) この土砂災害については研究者によって異なる用語を用いているが、当節では現浅間園付近の発生地点から吾妻川流入までを「鎌原土石なだれ」、吾妻川流入後を「天明泥流」としている。
(注2) 「噴火の土砂洪水災害」天明の浅間焼けと鎌原土石なだれ」井上公夫、2009、古今書院

(注3) 「浅間山天明噴火史料集成1-V」萩原進、1985、1995、群馬県文化事業振興会
(注4) 千葉県柏市個人蔵「注2」第II巻P332、348

(注5) 渋川市教育委員会所蔵、渋川市北極歴史資料館企画展「浅間山大噴火」泥流に流された村
1. 展示図録、2021

(注6) 「川島久保内・馬場遺跡発掘調査報告書」(渋川市発掘調査報告書)62、渋川市教育委員会、1998

(注7) 川越藩松平家、寛延2年(1749)姫路から前橋に移封になったが、前橋城が利根川に侵食され危険になったため明和5年(1768)居城を川越に移し川越藩となり、明和6年前橋城は破却され陣屋が置かれていた。天明三年時の藩主は松平直恒(まつだいらなおつむ)

⑨ 同人弟 忠右衛門 年四十六

是 八右同所

⑩ 同人子 松次郎 年廿才

是 八同部中村ニ而あがり、渋川村磯五郎世話ニ而相助り申候

⑪ 百姓 源六 寅松 三十五

是 八同部波部戸谷塚村にてあがり同村彦左衛門世話ニ而助申候

⑫ 百姓 九兵衛女子げん 年十七

是 八同部中村ニ而あがり

⑬ 百姓 伊平衛母はつ 五十三

是 八同部中村ニ而あがり

⑭ 百姓 源兵衛妻なつ 四十才

是 八同部漆原村ニ而あがり、同村庄治郎世話ニ而助り申候

⑮ 名主 十兵衛女子ひやく 廿四才

是 八同部漆原村ニ而あがり、同村玄治郎世話ニ而助申候

⑯ 百姓 治助妻はつ 五十才

是 八同部中村ニ而あがり、同村文蔵世話ニ而助申候

⑰ 百姓 りん 六十六才

是 八同部中村ニ而あがり、同村源八世話ニ而相助り申候

⑱ 同人内藤右衛門 四十八才

是 八同部実政村ニ而あがり前橋田新町久八世話ニ而相助申候

⑲ 百姓 藤左衛門子義七 三十七才

是 八同部金井村ニ而あがり、同村平六世話ニ而相助申候

㉑ 拾九人 男拾七人

女人

右は御尋ニ付書面之書上ケ申候所相違無御座候已上

天明三年卯九月

上州群馬郡川島村

名主 清左衛門

組頭 孫兵衛
百姓代 甚五兵衛

二、「見分覚書」と「相助り人別帳」の記載内容

双方の記録とも一九人の生存者が記されており、「相助り人別帳」の⑥「庄左衛門」が「見分覚書」では「庄兵衛」、⑦安兵衛が「見分覚書」では百姓、⑧「百姓 りん」が「見分覚書」では「りん」、⑨藤右衛門が「見分覚書」では百姓と記載されているなど何点か記載が異なる点はあるものの年齢・性別はすべて一致し、救出された場所も異なる点はない。「相助り人別帳」は救出地点で誰の世話になったか記載されているものが多いが、「見分覚書」ではそのような記載は見られない。また、救出された人の年齢や性別に顕著な偏りは見られない。

根岸が見分のために江戸を出発したのは旧暦七月八日の泥流発生から二ヶ月近く経過した八月二十八日である。「相助り人別帳」には「右は御尋ニ付書面之書上ケ申候所相違無御座候已上 天明三年卯九月」とあることから、川島村に見分に入るにあたり根岸から報告を求められた名主が作成したのが「相助り人別帳」、それに基づいて救出された人を救出地点別に整理したのが根岸の「見分覚書」と考えられる。

なお、「見分覚書」には川島村の被害状況も記されているが、村高六八石余の内約七割にあたる四八六石が泥流で被災し、一三人が流死し、民家も一六八軒中、七割以上の二七軒が流失するという吾妻川下流域で最大の被害を受けた村である。これだけ大きな被害がでたのは、同村手前の左岸側で岩場が張り出し、同村は右岸のゆるやかな傾斜の河岸段丘面に位置し、さらに吾妻方面に向かう街道が吾妻川に沿い、その街道の周辺に民家があつたためだと考えられる。この災害後道路は山側に付け替えられ、集落も川から離れたところに移転している(注9)。

三、川島村流死者が救出された場所

川島村から泥流に流された人たちはどこで救出されたのであろうか。前出の二つの資料にもとづいて救出された地点を地図に示すと図のとおりである。最も多くの人が救助されたのは川島村から約一〇㎞下流の中村(現渋川市中村)で一〇名、最も遠方で救助されたのは四〇㎞近く下流の戸谷塚村(現伊勢崎市)である。

原田清右衛門御代官所

同国同郡（上野国群馬郡）

高六百八拾六石余

内四百八十六石余が泥砂火石入流

人別七百六十六人

内百十三人流死

家百六十八軒

内百二十七軒流失

馬百疋

内式拾八疋流失

此村方吾妻川附ニ候処、泥押の湖一村過半流失。天台宗宝昌寺本堂庫裡諸堂流失。其外御林宅々所不残流失。泥押之節相流し候者之内、百姓武七歳四十五、同人倅伊八歳十一才、百姓半兵衛衛ふき歳廿四才、百姓善右衛門歳五十五才、同人弟忠右衛門歳四十六才、同人倅松次郎歳廿才、百姓九兵衛娘けん歳十七才、百姓伊兵衛母はつ歳五十三才、百姓治助妻はつ歳五十五才、りん歳六十六才、川路三里程下利根川の内松平大和守領分中村ニて取上ケ、百姓九兵衛妻くに歳十九才、川路八里余下同川の内清井駿河守領分柴中町ニて取上ケ、百姓半兵衛歳五十四才、百姓庄兵衛歳三十六才、川路四里余下同川の内松平大和守領分川原嶋村ニて取揚、百姓安兵衛年五十三才、同川通六里程下松平大和守領分惣社村ニて取上ケ、百姓源六伴寅松年三十五才、川路九里程下同川の内遠藤平右衛門御代官所戸谷塚ニて取上ケ、百姓源兵衛妻なつ歳四十才、名主十兵衛娘ひやく年廿四才、同川通六里余下松平大和守領分漆原村ニて取上、百姓藤右衛門年四十八才、川路六里余下同川の内松平大和守領分実正村ニて取上、百姓藤左衛門倅儀七年廿七才、一里余吾妻川通の内辻六郎左衛門御代官所金井村ニて取上、夫々又相送り候旨村役人共申之候。(注7)、(注8)

(2)「天明三年 流人相助り人別帳」

本資料は川島村で名主を務めた個人宅に伝わったもので、近年、渋川市教育委員会が

散逸直前にレスキューした資料群に含まれていたものである。この時収集した資料群は現在渋川市北橋資料館で保管され、整理が進められている。横冊で表紙背表紙を含めて四紙からなり、救助された全員の名前・年齢・性別、救助された場所のほか多くの救出者が誰に救出され世話をうけたかが記されている。他の被災村で救出された人の人別帳が作成され残っている例は現段階では例がなく、本資料はたいへん稀少なものである。

「相助り人別帳」に記載された内容は次のとおりである。

表題

天明三年

流人相助り人別帳

卯九月 上州群馬郡

川嶋村

- ① 百姓 武七 年四十五才（○数字は説明のため筆者が記入）
是八同郡中村ニ而揚り、同村千蔵院世話ニ而相助り申候
- ② 同人子 伊八 年十一
是八右同断
- ③ 百姓 九郎兵衛妻くに 年十九
是八同郡波郡之中町名主藤吉世話ニ而相助り申候
- ④ 百姓 半兵衛 年五十四
是八同郡川原嶋丹七世話ニ而相助り申候
- ⑤ 同人女子 ぶき 年廿四
是八同郡中村ニ而あがり、石原村清兵衛世話ニ而相助り申候
- ⑥ 百姓 庄左衛門 年三十六
是八同郡川原嶋伊左衛門世話ニ而相助り申候
- ⑦ 安兵衛 年五十三
是八同郡惣社町あがり、同村要七世話ニ而相助り申候
- ⑧ 百姓 善右衛門 年五十五
是八同郡中村ニ而あがり、石原村半七世話ニ而相助り申候

天明泥流から救出された人々（一）

—上野国群馬郡川島村を例に—

古澤 勝 幸

はじめに

天明三年（一七八三）七月八日（旧暦）に浅間山の噴火によって発生した鎌原土石なだれ（天明泥流〔注1〕）では一五三人の犠牲人命が奪われ、二〇六五軒が被災した。（注2）この災害については多くの記録が残されたのは幕原進によって「浅間山天明噴火史料集成I-V」（注3）にまとめられている。この史料集成には泥流に流されつつも立木にしがみついたり難を逃れた人や、下流の川沿いの村での生々しい救助活動の様子を記したものが、なかには行徳や銚子まで流された人が生還したことが書かれた古記録が二〇点近くも収録されている。ここに収録されたもの以外にも救出に関する資料は残っていると思われるが、これまで被災者の救出に関する研究はあまり注目されてこなかった。

本来の研究のあり方としては、救出に関する資料や救出された人や場所の全体像をとりまとめ、その中で一件ごとの状況について深めていくべきである。しかし、古記録等の記載内容には精査が必要なものが多い。そこで本稿では、泥流被災者救出に関する調査研究の第一歩として、古記録の中で正確な内容が記されていると考えられる勘定吟味役根岸九郎左衛門が記した「浅間山焼に付見分覚書」（以下「見分覚書」〔注4〕）と、近年所在が明らかになった川島村名主文書の「天明三年 流人相助り人別帳」（以下「相助り人別帳」）〔注5〕の二点の資料をもとに、川島村で被災し被災者された人々について紹介したい。

一、川島村の概要と救出記録

川島村は明治三年（一八八九）の合併で阿久津、祖母島、金井、川島、南牧の村が合併し金島村となり、昭和二十九年（一九五四）渋川市に合併、現在は渋川市川島

となっている。

渋川市北部、榛名山の北西面のすそ野の末端部が吾妻川に入り込む部分に位置する。上越新幹線が東京方面から榛名トンネルをぬけ、吾妻川をわたる際の橋梁の西側にある吾妻川右岸の地域であり、橋梁のほぼ直下の畑には泥流によって運ばれここに残された幅一五m高さ四mもの大きな溶岩塊「金島の浅間石」（群馬県指定天然記念物）が保存されている。吾妻川下流部では最も大きな被害を受けた村である。一九九八年には旧川島村内の「川島久保内・馬場遺跡」の発掘調査が行われ（注6）で天明泥流に被災した式内社甲波宿禰神社の礎石等が出土したことが報告されている。

川島村で泥流に流され救出した人のことを記した「見分覚書」と「相助り人別帳」の概要および記載内容は以下の通りである。

（一）浅間山焼に付見分覚書

この記録は幕府の見分役として被災地の調査・復興を主導した幕府勘定吟味役根岸九郎左衛門が記したものであり、浅間山天明噴火に関する幕府側の唯一の記録である。吾妻川南縁（右岸）の吾妻郡大笹村から群馬郡阿久津村、吾妻川（左岸）大前村から群馬郡白井村、利根川南縁（右岸）群馬郡渋川村から榛澤群中瀬村、利根川北縁（左岸）勢多郡上大崎村、新田郡平塚村の被害田畑、家屋、流死人、流死馬等が記され、このほか、降灰被災地である碓氷郡坂本宿、信州佐久郡軽井沢宿、同寄掛宿の被害状況や廻村中に村々で見聞した事情が記されている。このうち、川島村（現渋川市川島）、北牧村（渋川市北牧）には救助された村民全員の名前・年齢・性別をはじめ、いくつかの村での救助の様子が書かれている。

「見分覚書」の川島村の記載内容を抜粋すると次の通りである。

長野原町やんば天明泥流ミュージアム 年報

第2号

令和4年度事業報告

令和5年11月22日 印刷

令和5年11月30日 発行

発行 長野原町やんば天明泥流ミュージアム
〒377-1309 群馬県吾妻郡長野原町大字林 1464-3
TEL 0279(82)5150 FAX 0279(82)5152

印刷 ジャーナル印刷株式会社